

論争する女性哲学者、メアリ・ヘイズ

——エルヴェシウスの受容と女性の知的能力の擁護——

梅垣 千尋

《要旨》

本稿は、女性でありながら「知を愛する者 (philosopher)」になるという、過去の時代におそらく無数にみられたであろうチャレンジングな試みの一例として、メアリ・ヘイズ (Mary Hays, 1759-1843) の著述活動に焦点をあてる。ヘイズは1790年代のイギリスで、哲学を中心とする当時のさまざまな議論を吸収した上で、自身の経験に照らしてそれらを独自に吟味し、さらに『マンスリー・マガジン』という定期刊行物の誌上で、意見を異にする複数の論者にたいして果敢に論争を挑んだ。彼女がこの論争のなかで展開したのは、フランスの功利主義的な思想家として知られるクロード＝アドリアン・エルヴェシウスの擁護、そして、女性が男性と同等の知的能力をもちうるとする主張であった。本稿では、この論争におけるヘイズの主張を詳しく分析し、彼女がエルヴェシウス哲学の独創的な受容によって、一時は師と仰いだことのあるウィリアム・ゴドウィンの哲学とも、また尊敬する親友メアリ・ウルストンクラフトの主張とも異なるオリジナリティを示しうる思想をかたちづくっていたことを明らかにする。

キーワード：メアリ・ヘイズ、女性、哲学、論争、エルヴェシウス

はじめに

学問世界は古くから、男性をその中心的な担い手としてかたちづくられてきた。中世ヨーロッパで生まれた大学という場は、何世紀にもわたって男性のみからなるホモソーシャルな空間であり続け、女性にたいしてようやく門戸が開放されるようになったのは、各国で女子高等教育要求運動が本格化した19世紀後半以降のことにすぎない。もちろん、人びとの学術的な営みが大学の内部だけに限定されていたと考えるのは、現代の場合もそうであるように、あまりにも視野が狭すぎる。とくに近代以降、書物や定期刊行物の閲読、公開の講演会や説教への参加、知的関心を共にする者同士の会話や文通など、人びとは学ぶ気さえあれば、大学の外部にあって日常生活の延長線上で、学問に触れる機会をさまざまに得ることができただろう。しかしその一方で、大学という機関が成立以来、蔵書や

人的ネットワークなどの研究資源を一手に蓄え、社会にたいして一定の知的権威を保持し、学問世界そのものを主導してきたこと自体は疑いようがない。したがって、大学が長らく男性によって独占されていたという、今となっては動かしようのない歴史的事実は、学問世界のジェンダー的な偏りを、これまでも陰に陽に規定してきたし、今後も当面そうすることをやめないように思われる。人類の知的遺産たる学問の発展と継承を、女性がみずから担おうとする場合には、どうしても先達の男性たちによってすでに築きあげられた世界のなかに、レイトカマーとして参入するという形態をとらざるをえないからである。

さて、このように男性中心性を深く刻印された学問世界のなかに、みずから——たとえレイトカマーになることを運命づけられていたとしても——知の担い手として参入しようとした女性たちが、過去にまったく存在しなかったのかと問われれば、答えは否である。女性が大学の正規の学生として受け入れられるようになるよりずっと前から、そうした女性たちは確実に存在した。その発掘作業は、1970年代に欧米をはじめとして世界中で盛りあがった「ウーマン・リブ」運動の余波を受けて、1980年代ごろから歴史学の一分野としてさかんになった女性史研究のなかで、粘り強く続けられてきた。とくに近年では、こうした地道な研究の蓄積を、よりわかりやすく一般読者向けに伝える書物の刊行も相次いでいる¹⁾。たとえば、もっとも男性によって独占されてきた領域とみなされがちな「哲学」の世界で、それぞれのやり方で地歩を築いた20人の女性思想家たちに光を当てた『哲学の女王たち——もうひとつの思想史入門』(原著2020年)という本がある。編者のレベッカ・バクストンとリサ・ホワイティングによれば、すでに現代では、哲学者といえば「白人の男性が肘掛け椅子で考えに耽っている」というイメージが定着してしまっているが、それは「哲学」があまりにも狭く定義され、実際には「哲学者」と呼びうるような女性たちが、たんに「政治活動家 (activists)」や「学のある女性 (learned ladies)」としてしか認識されてこなかったからであるという²⁾。

たしかに「哲学 (philosophy)」が、その語源からして「知への愛 (philo-sophia)」という意味をもち、厳密にカテゴリー化された一研究領域というよりは、むしろ広く学問研究一般を指す言葉であることを思い起こすなら、みずから「知を愛する者 (philosopher)」となった女性たちが過去にいたとしても、何ら不思議ではない。「女性哲学者」、「女性思想家」、「女性知識人」——。彼女たちのことをどのように呼ぶにせよ、これらの言葉に一定の違和感がつきまとうとすれば、それは彼女たちの存在自体が奇異だからではなく、私たちが「哲学者」「思想家」「知識人」という言葉を、暗黙のうちに男性の性をもつ存在としてしかイメージしてこなかったからであるにちがいない。そこで作用しているのは、ジェンダーをめぐるアンコンシャス・バイアスにほかならない。

とはいえ、誰についても無条件で「哲学者」「思想家」「知識人」と呼ぶことができるかといえば、そうではない。どれほど広い言葉の定義をとったとしても、ある人がこれらの呼称を得るためには、一定の条件を満たす必要があるはずである。その条件が何なのかと考えた場合、第一にあげられるのは、それまでの学問世界の知的蓄積を十分に吸収してい

ることだろう。過去にどのようなテーマがどのように論じられてきたのか。誰がどのような主張を唱えたのか。これらの基本的な事柄に精通せずして、「知を愛する者」を標榜することには無理がある。

その上で、第二の条件として考えられるのは、それまでの学問的蓄積にたいして、自分自身のオリジナルな主張や命題を、明確に提示できることである。私たちが「哲学者」「思想家」「知識人」といった存在に期待するのは、ただたんに多くの書物を読み、知識を備えていることだけではなく、そうした蓄積の上にその人ならではの揺るがぬ見解をもち、深い思考の道筋を社会にむけて発信できることだろう。こうした思考の独立性は、それまでの学問的蓄積にたいする公然たる批判というかたちで、もっとも明瞭に示される。ある問題についてこれまで論じられてきたことがどれほど不十分であったのか。ある論者の主張がいかに「真理」から隔たったものなのか。相手にどれほどの権威があろうとも、従来なされてきた議論の瑕疵を指摘したり、見解を異にする論者にたいして論戦を挑んだりすることは、自身に固有な独立した思考能力があることを証明するためのもっとも有効な方法となる。

だが、ここでふたたび女性の問題に戻るなら、この二つの条件はいずれも、少なくとも19世紀ごろまでの社会に生きた女性にとって、高いハードルとなりえた。まず、第一の条件をクリアしようとする際に立ちはだかるのが、知へのアクセスの問題、とくに言語の問題である。ヨーロッパに限っていえば、ギリシャ語とラテン語の習得は、長きにわたって古代以来の学問的蓄積に直接アクセスするための絶対的な必要条件であった。18世紀ごろから次第に各地の口語で書かれた書物の出版が増え、古典語をマスターせずとも一定の学問的知識が得られるようになるとはいえ、とりわけ制度的に大学から排除された女性の場合、この言語上のハンディキャップは、「知を愛する者」を名乗ることの正当性を根本から崩しかねなかった。

次に、第二の条件を満たすことの難しさは、制度的というより、心理的な面での女性の制約に関わる。まさしく「戦い」というメタファーが用いられる批判や論争という実践は、それ自体として男性的性格を帯びており、「恭順」「柔和さ」「優美さ」などが社会的に期待されがちな女性にとっては、忌避すべきものに映らざるをえなかったからである。たとえ従来の学問的蓄積や権威ある論者の主張にたいして、内心では一言をもっていたとしても、社会的規範に従おうとする女性であれば、その違和を公のもとでの論戦というパフォーマンスによって表現することなど、思いも寄らなかったにちがいない³⁾。要するに、女性が「哲学者」「思想家」「知識人」と呼ばれるに値する著述活動を行うことには、独特の困難がつきまといったということである。過去の「女性哲学者」について考える際には、まずこの前提をよく認識しておく必要がある。

さて、すっかり前置きが長くなったが、本稿ではこのように、女性でありながら「知を愛する者」になるという、おそらくは19世紀より前の時代にも無数にみられたであろうチャレンジングな試みの一例として、メアリ・ヘイズ (Mary Hays, 1759-1843) という女

性が18世紀末のイギリスで展開した著述活動に光を当てる。彼女は、現代では『エマ・コートニーの回想』(1796年)という小説がその代表作とされ、もっぱら「小説家」という肩書きで知られているが、20世紀のもっとも早い時期にヘイズに関心を寄せた英文学者、ジョイス・M・S・トムキンズは、ヘイズを「女性哲学者 (philosophess)」と呼んだ⁴⁾。たしかに、1790年代半ばにおけるヘイズの知的営みの足取りを辿っていくと、まさに「哲学者」としてのそれにふさわしいことが明らかになる。彼女は、哲学を中心とする当時のさまざまな議論を吸収した上で、自身の経験に照らしてそれらを独自に吟味し、さらに『マンスリー・マガジン』という定期刊行物の誌上で、意見を異にする複数の論者にたいして果敢に論争を挑んでいたからである。

本稿は、こうした「論争する女性哲学者」としてのヘイズの姿に着目し、その個別ケースから女性と学問世界の関係について考察することをもって、本研究プロジェクト「大学におけるジェンダー教育と男女共生社会」の成果発表に代えるものである。

1. メアリ・ヘイズ——その独自性

ヘイズは日本において、英文学研究の世界はさておき、思想史研究の世界ではほぼ無名の存在であるといつてよい⁵⁾。より知名度の高い思想家たちとの関わりで、ごく単純化させて彼女を紹介するなら、「アナキズムの祖」といわれる哲学者ウィリアム・ゴドウィン (William Godwin, 1756-1836) の「門徒」⁶⁾、また、「フェミニズムの先駆」とされる思想家メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759-1797) の親友⁷⁾、という位置づけで足りるだろうか。周知のようにゴドウィンとウルストンクラフトは結婚し、そのあいだに『フランケンシュタイン』(1818年)の著者となるメアリ・シェリー (Mary Shelley, 1797-1851) が生まれるが(この出産によってウルストンクラフトが命を落としたことも有名な話だろう)、そもそも恋人になるべくこの二人を引き合わせたのは、ヘイズその人であった⁸⁾。少し下の世代に属するロマン派の詩人たちとの接点をエピソード的につけ加えてもよいかもしれないが⁹⁾、いずれにせよヘイズが著名な思想家たちの影に隠れた脇役的なポジションを、生前も死後も余儀なくされたことは否めない。

そのヘイズが人びとの注目をもっとも集めることになったのが、先述の『エマ・コートニーの回想』である。この小説の主人公は、上流階級出身の父をもち、誕生と同時に母を亡くしたエマ・コートニーという女性で、彼女がさまざまな読書経験をつうじて、また父親の友人である騎士道精神の賞賛者モンタギューや、因襲に囚われない合理主義者フランシスとの交流をつうじて成長していく過程が、物語の前半のプロットを占める。だが、エマがオーガスタス・ハーリーという男性の存在を知ると、その主題は恋愛へと急旋回していく。物語の後半を駆動するのが、ハーリーにたいする抑えきれないエマの愛であり、その激しい感情は、エマが綴る手紙のなかでほとぼしるように語られる。エマは、社会の進歩に貢献する方法について意見を交わしたことのあるフランシスにたいして「情念」の力を

擁護する手紙を書き、またハーリーにたいしては、大胆にも「私自身をあなたに捧げましょう (*I would give myself to you*)」とみずから結婚を要求した上、驚くべき執着力で自身の「非合理 (irrational) でも利己的 (selfish) でもない」愛情を説く¹⁰⁾。結局、エマの願いが成就することはないのだが、この尋常ならざる切迫感をもった彼女の語りは、読者を圧倒せずにはいない。さらに、こうしたエマの手紙の内容そのものと並んで衝撃的なのは、それらの語りが、実際にヘイズ自身が実在の人物に宛てて書き送った手紙にもとづいていたという事実である。

ことの顛末はこうである。ヘイズは、30代はじめに「ユーセビア」という筆名で初めて出版した『公的ないし社会的礼拝の便宜性と妥当性についての探究にたいする雑駁な所見』(1791年)というパンフレットへの賞賛の手紙を受け取ったことをきっかけに、1792年5月ごろにウィリアム・フレンド (William Frend, 1757-1841) という男性と知り合い、親しく交流するようになっていた¹¹⁾。フレンドはケンブリッジ大学で数学を学び、卒業後の1781年にはジーザス・カレッジのフェローになって学問の道を歩んでいた。だが、1780年代末ごろから非国教徒 (ユニテリアン) としての信仰をもつようになり、さらには1793年初頭に出版した『平和と連合』という政治パンフレットのなかで、革命フランスとの戦争を開始したイギリス政府を公然と非難したため、これを「扇動的」な文書とみなしたジーザス・カレッジから処分を受け、実質的に大学からの追放を余儀なくされる¹²⁾。急進的な思想信条ゆえにアカデミックなキャリアを絶たれたフレンドが、同じく非国教徒として社会の変革を求める立場をとっていたヘイズにとって、殉教者的な英雄に映ったことは想像にかたくない。彼女は1794年ごろからフレンドに恋愛感情をもつようになり、何通もの長い手紙を書いて結婚の願望を伝えたのだが、これにたいしてフレンドは曖昧な態度をとり続け、ついに1795年末か1796年初頭ごろ¹³⁾、ヘイズが対面で思いを告げると明確に断られてしまう。フレンド宛てのヘイズの手紙は、その所在が確認されていないものの (おそらくフレンドによって廃棄されたのだろう¹⁴⁾)、これが、小説のなかでエマがハーリーに宛てて綴っている手紙の原型であったと考えられている。

さらに、小説のなかでエマがフランシスに宛てて書いている手紙も、ヘイズが実在の人物に送ったものだった。ヘイズが先述のゴドウィンを受取人として書いた手紙がそれであり、こちらは現在も、ニューヨーク公共図書館とオクスフォード大学ボドリアン図書館に実物が所蔵されている¹⁵⁾。ゴドウィンが1793年に著した『政治的正義と、現代の道徳と幸福にたいするその影響に関する探究』(以下、『政治的正義』) は、フランス革命を歓迎したイギリスの急進派知識人のあいだで、出版後ただちに大きな反響を呼び、この本に熱狂したフレンドから、ヘイズは一読を勧められたらしい。価格の高さゆえに入手が難しいとみたヘイズは、1794年10月14日にゴドウィン宛てに直接、本を貸してほしいという手紙を送り¹⁶⁾、そこから二人の交流が始まった。現存する40通以上の往復書簡は、その大部分が1795年から1796年にかけてヘイズが綴ったもので、なかには長大な手紙も含まれる¹⁷⁾。『政治的正義』を読んで抱いた感想や疑問、フレンドへの恋愛感情、結婚の望みが絶たれた事

実の内省、女性が置かれた不利な状況についての考察など、ヘイズはときに無力さを嘆き、ときに苛立ちを露わにしながら、きわめて率直に自身の気持ちや考えを、「私の良い医者 (good physician)」¹⁸⁾ と呼ぶゴドウィンにたいしてぶつけていった (フレンドとの一件を私たちが詳しく辿ることができるのも、この手紙があるおかげである)。

18世紀にはすでに「書簡体小説」というジャンルが成立していたとはいえ、プライヴェートな手紙をそのまま小説に載せるというのは、かなり思い切った方法であるように見える。しかし、ヘイズはじつは20歳ごろ、最初の恋人が結婚目前に急死するという不幸に見舞われたのち、二人の往復書簡をそのまま出版するつもりでいたことがあり¹⁹⁾、彼女にとって手紙とは、それを書いた人物のその瞬間の「真実」を映しだす鏡として、さほどの躊躇なく公のもとに提示できるものだったようである。ゴドウィンから、フレンドとの関わりのなかで経験したことを小説にしてみないかと提案されたヘイズは、1796年初頭、原稿をゴドウィンに読んでもらうという前提で、彼女が呼ぶところの「哲学的ロマンス (philosophical romance)」の構想と執筆に取りかかり²⁰⁾、「自分が感じたことのないことは書けない」という理由から、そのなかにフレンドとゴドウィンに宛てて書いた自分の手紙を挿入することに決めた²¹⁾。小説というジャンルを手がけるのは初めてであったため、当初は自信なさげであったものの、ヘイズは同年2月から6月にかけての手紙で、原稿を読んだゴドウィンからの批判にたいして、激しい調子で自分の作品を擁護している。登場人物の描き方、プロットの組み方などを考え直すよう勧められても、「この物語はあまりにもリアルで、私はその真実を踏みにじることができない」と述べて²²⁾、一步も譲ろうとしなかった。この攻防からは、たんなるゴドウィンの「門徒」としてではない、自身の哲学的立場を打ち立てようとするヘイズの格闘の様子が浮かびあがる。果たして実際、どれほどの書き直しがあったのかを確認するすべはないが、その最終的な原稿は『エマ・コートニーの回想』という題名で、同年11月に出版されることになる。

こうした興味深い執筆の経緯から、この小説は、研究者たちの関心を引いてきた。女性の性的情念というテーマ設定、既存の社会秩序と戦う「ジャコバン小説」としての性格など、この小説に込められたヘイズのねらいをめぐっては、これまでにさまざまな解釈がなされている²³⁾。だが、ヘイズはこの作品の序文のなかで、主人公エマの「きわどい経験の結果」を「模範 (example) というより警告 (warning) として」受け取ってほしいと述べており²⁴⁾、彼女が作者として何をどう意図したのかを、小説のテキストだけから読み取ることは難しい。その意味で、ヘイズに関するここ20年ほどのあいだの研究が、文学的なテキスト分析よりも哲学を含む思想分析を軸として進展してきたことは、自然な成り行きであったといえる²⁵⁾。こうした本格的な思想史研究を牽引してきたのが、マリリン・L・ブルックスとジーナ・ルリア・ウォーカーである。前者は、1995年に博士論文『メアリ・ヘイズの著述の批判的研究』をまとめたのち、2004年にゴドウィンとの文通を含むヘイズの浩瀚な書簡集を出版した。また後者は、2006年に『メアリ・ヘイズ (1759-1843) ——ある女性の精神の成長』という研究書を著して、若い時期から晩年にいたるまでのヘイズ

の「知的探求」の道のりを初めて克明に描きだした²⁶⁾。さらに2010年代になると、ティモシー・ウェランが発掘した新しい書簡史料によって、これまで「葬られた人生」であるかのように語られていた1800年以降のヘイズの活動も、次第に明らかにされつつある²⁷⁾。

さて、本稿は冒頭で述べたような問題意識から、ヘイズが『マンスリー・マガジン』という月刊誌上で展開した論争に焦点を合わせるが、この視角はもちろん、『エマ・コートニーの回想』だけに関心を収斂させずに彼女の知的営みを把握しようとする近年の研究動向と、その大きな方向性を共有している。判明しているかぎり、ヘイズは1796年6月から1800年7月までのあいだに、この月刊誌に合計10本の論説を寄稿した（そのなかには、1797年の9月と10月に相次いで掲載されたウルストンクラフトの追悼記事も含まれる）。このうち本稿が注目するのは、1796年6月から1797年5月までの約1年間に書かれた6本の論説である。そのなかでヘイズは、特定の論敵の主張に対抗して、フランスの功利主義的なフィロゾフとして知られるクロード＝アドリアン・エルヴェシウス（Claude Adrien Helvétius, 1715-1771）の思想の擁護、そして、女性が男性と同等の知的能力をもちうるとする主張を展開した。これらの論説が本稿にとって重要なのは、議論を戦わせることで「真理」を探究しようとするその営みが、まさに女性であっても「知を愛する者」であろうとするヘイズの意図的な実践であったと考えられるからであり、また執筆時期が示すように、それを、フレンドへの恋に破れ、ゴドウィンとの対決をへるなかでかたちづくられたヘイズの哲学的思想のもっとも新鮮な表明とみなすことができるからである。

この『マンスリー・マガジン』誌上でのヘイズの著述活動は、研究史上、かなり手薄な部分に属する。1971年に発表された論文で、初めてその寄稿の事実を突きとめたのはパートン・R・ポリンであったが²⁸⁾、管見のかぎり、それがこの論争を主題とした唯一の論文となっている²⁹⁾。もっとも、先述したウォーカーの研究書、またブルックスの博士論文のなかで、この論争が扱われていないわけではない。だが、ポリンのものを含めた先行研究は、とりわけこの論争のなかで示されたヘイズのエルヴェシウス哲学の受容について、十分な検討を行っているとはいえない。ウォーカーは、「体系的な思想家（a systematic thinker）」ではないヘイズは、エルヴェシウスの「思想全体を飲み込んではいなかった」と述べて、エルヴェシウス哲学の影響を正面から取りあげないことを正当化しているが、それは思想の受容というものをあまりにも狭く捉えた見方であるといわざるをえない³⁰⁾。そもそもヘイズのエルヴェシウス理解を、そこまで表層的なものとしなしてよいのかという疑問も残る。他方、ブルックスの未刊行の博士論文は、この月刊誌上のヘイズの論説にみられるゴドウィン、そしてエルヴェシウスとの哲学的関係の考察に一節を割いており³¹⁾、本稿にとってきわめて示唆的な内容を含むが、ヘイズがいかにエルヴェシウス哲学を内面化したのかという点については、まだ指摘すべきことが少なからず残されているように思われる。

その詳しい検討に入る前に、まずはこの論争がどのような経緯を辿ったのかを、おおまかに確認しておくことにしよう。

2. 『マンスリー・マガジン』誌上の論争

『マンスリー・マガジン』は、1796年にロンドンで創刊され、1824年まで続いた月刊誌である³²⁾。イギリスでは出版文化の繁栄にともない、18世紀半ばから『ジェントルマンズ・マガジン』(1731年創刊)、『マンスリー・レビュー』(1749年創刊)といった書評や時事問題を扱う定期刊行物が好調な売れ行きをみせていた。後発にあたる非国教会系の『マンスリー・マガジン』は、英文学者マリリン・バトラーの言葉を使えば、「この世紀に出された定期刊行物の最良の特徴」をもち、先行するものより「はるかに学究的 (bookish)」で、「リベラルな中産階級の知性」という理想を高く掲げた雑誌であった³³⁾。主幹のリチャード・フィリップス (Richard Phillips, 1767-1840) を中心とする編集部が示した創刊号の序文では、この月刊誌の目的として、「楽しくためになる情報と討議のさまざまな対象」の提示と、「もっとも重要な人類の関心事のいくつかに関わるリベラルな原理 (liberal principles) の普及」という二点があげられている³⁴⁾。

周知のように、1790年代初頭のイギリスではフランス革命の勃発にともない、非国教徒をはじめとしてこれを歓迎するいわゆる急進派と、エドモンド・バークに代表されるように、こうした気運を危険視する保守派のあいだで「革命論争」が巻き起こった。『マンスリー・マガジン』の関係者が前者の流れを汲んでいたことはいうまでもないが、1792年5月になると、政府が「扇動的」な文書の取り締まりの強化に乗りだし、トマス・ペインの『人間の権利』(1791-92年)の出版や販売に携わる者たちが相次いで逮捕されるなど、急進派の自由な言論活動そのものが困難になっていった。フィリップス自身も『人間の権利』を販売したことで、1793年1月に投獄されている³⁵⁾ (もちろん先述したフレンドの大学追放も、この動きの延長線上に位置づけられる)。1796年2月に創刊された『マンスリー・マガジン』は、その出発点から、人びとにこうした不当な萎縮を強いる政治状況にたいする抵抗という明確な使命を帯びていたといつてよい。自由な意見交換と、それによる社会の改善こそ、この月刊誌のモットーであった³⁶⁾。

その意味で、政治的に対立する者同士で展開された革命論争の場合とは異なり、『マンスリー・マガジン』は、いわば「内輪」のメディアであり、そこでは一定の政治的スタンスを共有する者同士が、互いに安心して忌憚のない論争を戦わせることができた。この月刊誌の柱となっていたのは、主幹宛ての手紙というかたちをとった、その多くがイニシャルや筆名しか付されていない論説であったが、それらが創刊号からすでに数多く掲載されていた事実からは、編集部の仲間うちだけで、書き手を十分に確保できていた様子がうかがえる。創刊号に「J.T.」から寄せられた「エルヴェシウスについての所見」も、そうした論説のひとつであった³⁷⁾。エルヴェシウスは、バークの『フランス革命の省察』(1790年)のなかで、ルソーやヴォルテールとともに攻撃対象とされたフィロゾーフであったが³⁸⁾、1790年代前半にかけて、たしかにイギリスの若い急進派のあいだでは、彼の思想が流行していた³⁹⁾。こうした熱狂から距離をとる「J.T.」は、人間の能力のすべてが教育の産物で

あるとするエルヴェシウスの主張にたいし、フアン・ウアルテ（デカルトにも影響を与えたとされる16世紀スペインの教育思想家⁴⁰⁾）の著作を引用しながら、人間の知性には生まれながらの向き不向きがあるのではないかと疑問を呈し、その主張の根拠薄弱さを指摘した⁴¹⁾。

ところで『マンスリー・マガジン』には、読者から寄稿される論説のほかに、いかにも議論が分かれそうな主題を扱った「探究者 (The Enquirer)」という長めの定期コラムも、創刊号から掲載されていた⁴²⁾。「探究の自由は制限されるべきか？」（創刊号）、「国家が若者の教育に介入するのは望ましいか？」（2号）に続き⁴³⁾、3号の「探究者」で提起されたのは、「文学的および科学的な研究は女性の性格にふさわしいか？」という問いであった。そのコラムでは、架空の三人の女性——聡明で穏健な年長の「マーガレッタ」、そして気晴らし好きな「ソフィア」と、ウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』を信奉する真面目な「イライザ」という二人の対照的な姪たち——が繰り広げる鼎談という形式で、この問いが扱われている⁴⁴⁾。だがもちろん、どのように答えを出すのかは読者の側に委ねられている。これにたいする素早い応答として、4号には「A.B.」からの「女性は男性より劣る」と題された短い投稿があり、女性の教育は現状よりも改善されるべきであるとはいえ、身体的な強さ以外の点で女性が男性に匹敵するという主張には賛成できない、とする意見が示された⁴⁵⁾。

さて、ヘイズの論説が『マンスリー・マガジン』に初めて掲載されたのは1796年6月刊行の5号で、「M.H.」というイニシャルによる「エルヴェシウスについてのJ.T.への回答」がそれであった⁴⁶⁾。創刊号の「J.T.」の主張にたいして明らかに戦いを挑む内容であったが、そもそもヘイズが1791年に初めて出版したパンフレットは、「ウェイクフィールド論争」と呼ばれる、非国教徒のあいだで盛りあがった礼拝方式をめぐる論戦に関わるもので、彼女にとって他者の主張に異議を唱えることは、（実名を明かして男性と同じように論戦を展開する勇氣は、このデビュー作にはみられなかったとはいえ⁴⁷⁾）さほどハードルが高いものとしては認識されていなかったようである⁴⁸⁾。ヘイズがどのようにエルヴェシウスを擁護したのかという点については、別の論説ともあわせて、この後の3でまとめて詳しく扱うが、この論説でも彼女は舌鋒鋭く、教育というものが状況や偶然を含むきわめて広範な過程であるとして、生得的な向き不向きという「オカルト的」考えに依拠する「J.T.」の主張こそ、根拠薄弱であると批判した⁴⁹⁾。

これにたいしては、早くも7号に「J.T.」の反論が載るが、議論は平行線を辿る。「J.T.」によれば、体格の違いと同様、知的能力は生まれつき各人で異なっており、学問研究の上で同じように努力をしても誰もが同じように成功するわけではないという経験則を踏まえると、「エルヴェシウスの体系」は「空想的な仮説」とみなすほかないという⁵⁰⁾。続く8号には、人間身体についての医学的な言葉を操りながら、「J.T.」の援護射撃をする「S.R.」という寄稿者も現れる。脳が思考を司る器官である点で、「唯物論者 (materialists) と非物質論者 (immaterialists)」はいずれも見解の一致をみており、脳の大きさや形状が各人

一様ではない以上、万人が平等な知的能力をもつとするエルヴェシウスの主張に反して、「生得的な適性 (innate aptitude)」は存在する、というのが「S.R.」の主張であった⁵¹⁾。

こうしたエルヴェシウス哲学の理解に関わる論争と並行して、翌月の6号 (1796年7月刊行) にヘイズが「ある女性 (A Woman)」という筆名で寄稿したのが、「女性は男性より劣る」とした「A.B.」の論説にたいする批判であった。こちらの論点についても詳しい検討は4に譲るが、ヘイズの基本的な主張はもちろん、女性の知的能力がたとえ男性のそれより劣っていたとしても、それは教育上の不利益の結果でしかない、というものである⁵²⁾。「M.H.」とは別人格として書かれていたものの、エルヴェシウスをめぐる議論で示された、人間の知的能力の違いが先天的か後天的かという対立 (いわゆる「氏か育ちか (nature or nurture)」問題) のうち、後者の立場をとる点で、そこには明らかに連続性があった。

このヘイズの主張にたいしては、ただちに次号にあたる7号で「A.B.」を支持する「C.D.」が、また9号で「A.B.」本人が反論を展開した⁵³⁾。「C.D.」は、女性は妊娠や子育ての時期に理解力を磨く機会が失われるとして、あらゆる時代と地域において女性が男性の劣位に置かれてきた事実を「神意」として受けとめるべきであると論じた⁵⁴⁾。「A.B.」は、文人や天才の事例から、同じく歴史貫通的・地域横断的な男性の知的能力の優位を指摘し、十分な教育を受けられなくても文学や科学において卓越性を示した男性がいた一方で、女性の場合にはそれがみられなかったことから、やはり女性の知性は男性のそれに劣ると結論づけた⁵⁵⁾。他方、こうしたミソジニー的な論調を中和するかのよう、8号には「フィロジニス (Philogynes)」という筆名 (「女性を愛する者」という意味) を用いた人物による、「女性の能力は男性と平等」という論説も掲載された。それによれば、この論争では、対立する両陣営がいずれも「能力 (talents)」という言葉をもっぱら出版活動に携わる文人のそれとして用いているが、それはあまりにも狭い定義であって、歴史上、女性がさまざまな力を発揮して政治的な変化をもたらしてきた事実をみれば、女性が優れた能力をもつことは明白であるという⁵⁶⁾。

ヘイズは10号 (1796年11月刊行) で、ふたたび「ある女性」という筆名を使って「A.B.」と「C.D.」に応答した。身体と精神のあいだに成り立つ因果関係を実証することの難しさ、女性が母親としての役割を果たすことで知識を追求できなくなる事実を「自然」とみなす議論の不合理性、過去の歴史にみられた女性の劣位が文明化の進展とともに覆る可能性など、論点は多岐にわたる。論敵の議論のなかに、論争相手が女性であるとみただけの見下した態度や、「真理」ではなく「勝利」だけを求める姿勢の不毛さを見て取る眼差しの鋭さにも、特筆すべきものがあった⁵⁷⁾。

ヘイズに関連する投稿がもっとも集中したのは、1797年1月に刊行された12号である。10号で「男性的な思いあがりと傲慢さ」をヘイズから指摘された「C.D.」が再登場して、ヘイズの論説で引用されていたデイヴィッド・ヒュームの文章 (ヘイズ自身が引用符の場所の間違いに気づき、11号に訂正記事を入れた部分⁵⁸⁾) が該当箇所には見つからないとクレームをつけた⁵⁹⁾ (しかしこれは誤解で、13号では、ヘイズの引用が正しいことが編集部

によって指摘されている⁶⁰⁾。またエルヴェシウスの擁護に関しても、言葉のあやで「法律家」には「誠実さ」がないとした5号での「M.H.」の言及にたいし、「L.」という人物（おそらく法律家）からの抗議が載った⁶¹⁾。さらにヘイズ自身の「M.H.」名による「エルヴェシウスの擁護」も掲載され、ここで二度目の「J.T.」批判が展開されることになる⁶²⁾。これを受けて、15号には「J.T.」の短い反論の文章が載ったが、エルヴェシウスの体系には根拠がないという一点張りで、とくに新しい論点は出なかった⁶³⁾。

一連の論争は実質的に、このあたりで終わりを迎えることになる。ヘイズは14号（1797年3月刊行）に、「A.B. と C.」（正しくは「A.B. と C.D.」だが、意図的な誤記かもしれない）の批判にたいする三度目の応答として、「女子教育によって促される改善」という論説を載せた。「ある女性」という筆名ではなく「M.H.」が使われていたため、読者はここで初めて、女性の知的能力の擁護とエルヴェシウスの擁護が、同一人物による主張であったと知ることになる。ただし、ヘイズはこの論説で、論敵への直接的な批判というかたちを選ばず、女性のみずから独立して生きることができるような教育の改善の必要性や、政府が個人の幸福実現の手段としてのみ価値をもつといった主張を全般的に説くことに注力している⁶⁴⁾。16号（同年5月刊行）には、同じく「M.H.」による「精神的能力は幸福をもたらすのか？」という論考が載った。それまでの論争で見落とされてきた論点を振り返るかのよう、ここでヘイズが新たに提起したのは、能力が逆境のなかで鍛えられるものであるとすれば、それは本人の幸福と両立しうるのか、という問いであった。この問題に答えを出す力が自身にないことを認めた上で、「より有能で独創的な寄稿者」からの回答を求める内容であったが⁶⁵⁾、その後、これにたいする応答が『マンスリー・マガジン』誌上に載った形跡はない。

さて、こうして時系列的に論争の経緯を追ってきたが、もちろんヘイズ自身の論考の内容については、より詳しい分析が必要である。3ではヘイズによるエルヴェシウス哲学の擁護、4では女性の知的能力の擁護について、その議論の特徴を掴んでいくことにしよう。

3. エルヴェシウス哲学の擁護

ヘイズがいつ、どのようにしてエルヴェシウスの著作——主として『精神論』（原著1758年、英訳1759年）と『人間論』（原著1773年、英訳1777年）⁶⁶⁾——に親しむようになったのか、はっきりとした事実関係を示すことは難しい。1796年刊行の『エマ・コートニーの回想』には、エルヴェシウスとその著作にたいする言及が5回あるが⁶⁷⁾、それ以前の著作では、彼女の二作目の出版物となった1793年の『道徳的および種々雑多な手紙と随筆』（以下、『手紙と随筆』）を含めて、とくにそうした記述はみられない。書簡史料から裏づけるなら、有力な証拠として、妹のエリザベス宛ての手紙のなかに、前日に「朝から晩まで」ルソーを読んだのち、「私は新たな活力でエルヴェシウスに戻ります」と書かれたものがある。だが、この手紙には日付がなく、時期は特定できない⁶⁸⁾。ゴドウィン宛ての書

簡のなかで、もっとも早くそれらしい言及があるのは1794年12月7日付けの手紙で、このなかでヘイズは、「強い情念、あるいは強烈な印象を受け取る能力は、強い精神力をとまなうといわれています」と書いたのち、その言明が「ある賞賛すべき著者」によるものであると示唆している⁶⁹⁾。

ヘイズが同年秋にゴドウィンから借りて読んでいた『政治的正義』には、部分的にエルヴェシウスに依拠した議論も含まれていたから⁷⁰⁾、やはりヘイズはゴドウィンを経由してエルヴェシウスに関心をもったのかもしれない。あるいは、すでに述べたように、このころ急進派の若者のあいだでは、ゴドウィンと並んでエルヴェシウスの人気も沸騰していたから、誰か別の心酔者から勧められた可能性もある。経緯はこの程度にしかわからないが、いずれにせよ1796年3月1日の時点になると、ヘイズはゴドウィンに宛てて、次のように書くまでになっていた。

もし私が誰かの門徒 (disciple) になっていたとしたら、それは十中八九あなたの門徒ということだったでしょう。もしエルヴェシウスの体系がより大きな確信をもって私の精神に浮かぶとすれば、それは彼の体系が私の経験と合致するからです。経験以外のどんな基盤に、私は依拠することができるのでしょうか？⁷¹⁾

この手紙でヘイズ自身がはっきりと記しているように、彼女がエルヴェシウスを信奉するようになったのは、その哲学が彼女の「経験と合致するから」、つまり、自身が経験してきたことを、腑に落ちるかたちで説明してくれると感じたからであった。実のところ、それはゴドウィンの哲学にたいする当初の熱意が、彼との対話や文通を通じて次第に低下していくのにともない、ヘイズのなかで反比例的に募っていった意識であった。二人のあいだの書簡を詳細に検討したブルックスによれば、ヘイズがゴドウィンにたいして不満を抱くようになった理由は、大きく分けて二つある。第一に、女性の置かれた固有の苦境をいくら訴えても、彼が関心を示さなかったからであり、第二に、ヘイズが社会の進歩に役立つものとして独自に捉え直そうとしていた、特定の個人にたいする「私的な愛情 (private affections)」(このときのヘイズの場合、具体的にはフレンドへの愛) を、彼が「利己的 (selfish)」かつ「偏愛的 (prejudiced)」なものと切り捨て、そこに何らの公共的な意義も見いださなかったからであるという⁷²⁾。

ゴドウィンが『政治的正義』のなかで、もし火事場に『テレマックの冒険』を執筆中のフェヌロン大司教と、女中として彼に仕える自分の妻か母親か恩人かの誰かがいたとして、どちらか一方しか救出できないということになった場合、「全体の善 (general good)」のためにフェヌロンを選ぶべきであると論じたことは、よく知られている⁷³⁾。この例が極端なたちで示すように、社会と人類の状態を改善するために「公平無私 (disinterest)」や「自己忘却 (self-oblivion)」の必要性を説くゴドウィンにたいして、ヘイズは1796年2月9日の消印付きの手紙にこう書いている。

私は人類を集会的には愛しません (I cannot love mankind collectively)。それは、私にとってはたんなる抽象です。どうして私が人類を愛すべきなのですか？人類は私を幸福にしませんし、私も人類を幸福にはできません⁷⁴⁾。

ヘイズの側に見れば、自分のような女性はそれまで受けてきた教育によって、望むと望まざるとにかかわらず、結婚生活という幸福を求めて個別的な対象に愛を注ぐ傾向があり、ゴドウィンのように一足飛びに「人類」へと思考を抽象化させることなど、不可能に近い。むしろ幸福追求にむけた個々人の「強い情念」を、公共の利益を促す力として肯定するエルヴェシウス哲学のほうが、ヘイズにとって魅力的に映ったのは当然のことだろう。まさにそうした女性の情念の力を『エマ・コートニーの回想』で描きだした、というのがブルックスの解釈であるが⁷⁵⁾、その内容についてはこれ以上の深入りを慎むしかない。

ふたたび『マンスリー・マガジン』に話を戻そう。エルヴェシウスの擁護という論陣を張るにあたって、ヘイズにこうした個人的な経験にもとづく思い入れがあったことは間違いないが、もちろん、そのことが論争のなかで前面に出されることはない。文脈から判断して、エルヴェシウスを推す理由として、ヘイズが論説のなかであげていると考えられるのは、次の二点である。つまり第一に、彼がいかなるものも自明視したり神聖視したりせず、「研究において放縦 (licentious)」であった点、第二に、それが「緻密で抽象的な哲学」でありながら、「実際のかつ人道的なこと (the practical and humane) に関係し、そのために役立つ」点である⁷⁶⁾。既存の価値規範にたいする挑戦的姿勢と、机上の空論だけに終始しない実践性、と言い換えてもよいだろうか。ここで選ばれた「放縦」という言葉は、1759年にフランスで『精神論』が焚書処分を下されたというスキャンダラスな経緯から⁷⁷⁾、たしかにエルヴェシウスの代名詞となっており、彼の哲学が投げかけた波紋とその意味合いを、ヘイズが十分に掴んでいたことをうかがわせる。

さて、2でみたように、『マンスリー・マガジン』誌上で大きな争点になっていたのは、エルヴェシウスの徹底的な環境決定論の評価であった。『人間論』で用いられていた表現をそのまま使えば、「通常の身体組織をもつ人間は、誰もが理解力において同じ資質をもつ」として⁷⁸⁾、生まれつきの知的能力の違いを否定したエルヴェシウスの主張の根拠が、「J.T.」らによって鋭く問われたわけである。たしかにこれは、その大胆さと明解さゆえに、もっとも人びとの目を引くエルヴェシウス哲学の命題であった。エルヴェシウス研究の第一人者である森村敏己は、それまでの研究者の関心が「認識論や唯物論といった哲学、そして広い意味での教育論に集中しがち」であったことを批判的に指摘しているが⁷⁹⁾、その傾向は、すでに18世紀末のイギリスでも顕著にみられたといってよい。「J.T.」への反論という明確な目的をもって書かれたヘイズのエルヴェシウス擁護もまた、当然、こうした領域の議論に力点が置かれることになる。

ヘイズがエルヴェシウスとともに強調するのは、教育というものの測り知れないほどの

範囲の広さである。彼女によれば、教育とは「教訓、偶然、社交 (social intercourse)、政治制度 (political institution) からなるものとして包括的に理解する」必要のあるものであり⁸⁰⁾、逐一記録して分析しきれないほど微細なものにまで及ぶ、こうしたあらゆる状況が、その人の性格——才能と徳——をかたちづくる⁸¹⁾。いわゆる「遺伝的体質 (hereditary temperament)」として作用するような、人間の「誕生に先立つ」状況があることを認める姿勢も示してはいるものの、ヘイズはそうした状況でさえ、この世に生まれた瞬間から開始する教育（もちろん、経験論哲学で想定されるところの、もっとも広義でのそれ）によって「ほとんど無限に」変えることができると主張する。彼女はさらに踏み込んで、「精神的な力だけでなく肉体的な力もまた (bodily as well as mental powers)」そうした教育の産物であるとみて⁸²⁾、「身体的差異 (physical differences)」でさえ「原因というより結果」であると証明できる可能性を示唆してもいる⁸³⁾。これはエルヴェシウスの議論から離れて、ヘイズ自身がつけ加えた記述であり、次章でみるように、とくに男女の性差について考える際には重要な論点となってくる。

さて、その一方で、ヘイズの論説から同時に読み取れるのは、このようにしてエルヴェシウスの哲学が、ことさら環境決定論の部分のみを取りあげて問題にされていることにたいして、彼女が不満を抱いていたことである。最初の「J.T.」批判で、エルヴェシウスがスパルタやジェスイットの例をあげて、政府の形態によって生まれる「国民的性格 (national character)」について説明したことにヘイズがわざわざ言及している点は、その徴候といってよい⁸⁴⁾。二度目の「J.T.」批判になると、エルヴェシウスの功利主義的な語彙を用いながら、ヘイズは「徳」を「もっとも効用 (utility) を導きうる、あるいは最大の幸福の分け前を生みだすべく考えられた行い」と定義した上で、人間がこの徳を「習性として (*habitually*)」実行できるようになるためには、法律上の罰則をはじめ、さまざまな機会や誘因のはたらきが必要であると指摘している。こうして人間の知的および道徳的能力の向上が、「制度 (institution)」のあり方に依存するという理解をヘイズが重視していたことは、「才能にたいして報酬が与えられる政府」において、偉大な文人が登場するとしたエルヴェシウスの文章を、彼女が長く引用していることから明らかだろう⁸⁵⁾。要するに、エルヴェシウスの哲学には、政治制度の改革要求に連なるような、より広い射程があるということである。先述した森村の『名誉と快楽——エルヴェシウスの功利主義』は、まさにこうしたエルヴェシウスの政治論と経済論にまで分け入った希有な研究書であるが、このなかで体系的に示されたエルヴェシウスの社会構想と引き比べてみると、ヘイズが少なくとも、適切な「賞罰 (sanction)」の導入によって名誉心という情念を正しく高めさせる統治機構を探究した彼の政治思想について⁸⁶⁾、その要点を掴んでいたことがよくわかる。

とはいえ、先の身体的差異への言及にもみられたように、ヘイズが論争のなかで、エルヴェシウスの議論をただひたすら忠実になぞっていたわけではない。興味深いのは、彼女が生得的な能力差の否定という主張の延長線上で、何度も繰り返し「逆境 (adversity)」

のなかから生まれる情念の力を強調していた点である。最初の「J.T.」批判の論説では、盲人が視覚の欠如ゆえに、かえって触覚と聴覚をより鋭くするという事例を紹介したのち、逆境は「叡智をもたらす学校」であるという格言が引かれている。ヘイズによれば、人間は安楽な状態に達すると、精神の活発なはたらきを止めてしまうが、「必要は発明の母」といわれるように、困難な状況に立たされるなかで利害関心をむける対象が見つければ、それだけ「人間の活動の源泉である情念」が強く呼びだされ、能力が新たに行使されるべく呼び覚まされる。それにたいして、「J.T.」が示す生得的な能力や適性という考え方は、あらかじめ乗り越えられない障害が存在するのだと説き伏せることで、目の前の困難に対峙してそれに打ち克とうとする人びとの勇気を挫くものにほかならず、これまで「無限の悪影響」をもたらしてきたという⁸⁷⁾。二度目の「J.T.」批判でヘイズは、子どもたちの勤勉さに生まれつきの違いがみられるとする「J.T.」の主張にたいして、こうした精励の姿勢が、学校教師のわずかな「ひと言、一瞥」だけで損なわれてしまうものであると強調しているが⁸⁸⁾、これも同様にして、能力の発達において、置かれた環境下での本人の熱意が決定的な意味をもつとする彼女の信念を表明したものといえるだろう。

エルヴェシウスは『人間論』で、人間が逆境との戦いをたえず強いられることにより、「より思慮深く明敏になる」ことは認めているものの、逆境が有益なのは、思考と内省の習慣がまだ身についていない幼少期のみであるとしている。また、逆境よりも「榮譽を求める情念」のほうが、より永続的な影響を及ぼして、偉大な能力を生み出す要因になると論じている⁸⁹⁾。ヘイズは明らかに、エルヴェシウスが述べていない主張をもちだして、エルヴェシウスを擁護しているわけである。こうした拡大解釈的な読み方は、もちろん一種の誤読ではあるだろう。しかしそれを、ヘイズによるエルヴェシウスの独創的な「領有」とみなすことも可能である⁹⁰⁾。すでに述べたように、この論争を行っていた時期のヘイズは、自分自身がまさしく「逆境」のもとに置かれていること——つまり、女性であるがゆえに十分な教育を受けられなかったこと、そして恋愛対象との結婚の夢が叶わず、かといって男性のように独立した生活を成り立たせるのも、また「世界の改革者」として社会を変えるのも困難であること——を、身をもって感じていた⁹¹⁾。人間の能力が生得的に決定されたものではなく、「逆境」に直面するなかで生まれる強い情念によって新たに獲得されるものであるという理解は、たとえ厳密にはエルヴェシウスの議論と一致していなかったとしても、彼女にとっては大きな救いであったにちがいない。先に引用したゴドウィン宛ての手紙には、「経験以外のどんな基盤に、私は依拠することができるのでしょうか？」という問いかけがあった。『マンスリー・マガジン』誌上での論争からは、まさにヘイズが自分自身の経験を説明する原理として、エルヴェシウスの哲学に依拠し、さらにそれを独自の視点から応用していたことが確認できる。

4. 女性の知的能力の擁護

次に、『マンスリー・マガジン』誌上でヘイズが展開した、女性の知的能力の擁護という議論に目を転じよう。男女のあいだの知的平等は、この論争のそもそもの発端となった「探究者」という定期コラムでも取りあげられていたように、すでにウルストンクラフトの『女性の権利の擁護』における中心的主張として知られていた。ヘイズがウルストンクラフトの強い影響下にあったことは間違いない。1792年初頭に出版されたこのウルストンクラフトの著作を友人の勧めで読み、その内容にいたく感激したヘイズが、初めてウルストンクラフトと対面したのは同年6月のことであったとされている⁹²⁾。同年齢ではあったが、二人のあいだの手紙を見ると、ウルストンクラフトのほうがリーダー的な位置にあったことは明らかで、ヘイズは1793年に刊行された自身の『手紙と随筆』の序文でも、「賢明なる女性の権利の擁護者」にたいして惜しみのない賛辞を捧げていた⁹³⁾。実のところ、『マンスリー・マガジン』に載ったヘイズの論説のなかにも、たとえば、文明化の進展にともない女性の隷従が改善されるとする展望や⁹⁴⁾、女性の精神的および道徳的改善を阻むルソーの言説への批判など⁹⁵⁾、ウルストンクラフトの主張と重なる内容は容易に見いだせる。しかし、ヘイズをたんなるウルストンクラフトのフォロワーとして片付けるわけにはいかない。

なぜなら、『マンスリー・マガジン』誌上の論争で示されたヘイズの女性論には、3でみてきたのと同じように、エルヴェシウスからの影響が認められるからである。エルヴェシウスは、女性や性差の問題に正面から取り組んだ思想家ではなかったが、先述の森村は、主要な二著作にみられる断片的な記述をもとに、その女性論を再構成する報告を行っている⁹⁶⁾。それによれば、エルヴェシウスは『人間論』で、「男女の身体組織はいくつかの点で非常に異なっているが、この違いは女性の精神が劣っていることの原因ではない」と断言して⁹⁷⁾、自身の独特な環境決定論を、男女を問わず徹底させた。続けてエルヴェシウスが述べるように、現に「サッフォー、ヒュパティア、エリザベス女王、エカテリーナ2世など」は、その才能において「何ら男性に劣らない」女性の実例であって、「一般に女性が劣っているとされるのは、彼女たちが受ける教育が劣悪なためである」⁹⁸⁾。つまり論理的な含意としては、広義での教育が改善されれば、女性は男性と何ら変わりなく知的能力を向上させることができるということになる。

「J.T.」批判にみられたように、エルヴェシウスをよく読み込んでいたヘイズが、この記述を素通りしたはずはない⁹⁹⁾。過去の偉人の例であれ、神意であれ、身体的な力の差であれ、さまざまな根拠をもちだして男女の知的な優劣を説く「A.B.」や「C.D.」と対峙するなかで、ヘイズがこうしたエルヴェシウスの言明から力を得ていたことはたしかだろう。それが、ウルストンクラフトの議論との微妙な違いが生じる原因にもなっていたと考えられる。その一つは、身体的な差異の捉え方である。ウルストンクラフトは、「男性のある程度の身体的な優越性は否定できない」と述べ、さらに男性が身体の構造上、女性よ

りも「強い情念」をもち、その情念と闘うことでより多くの「徳」を身につけることができる、と驚くほどあっさりとして認めていた¹⁰⁰⁾。それにたいして、ヘイズが「J.T.」批判のなかで、エルヴェシウスの議論をさらに引き延ばして、「身体的差異」が「原因」ではなく「結果」であると証明される可能性まで示唆していたことは、すでに3で触れた。男女のあいだに身体的な力の差があるのだから、知性においてもこれに対応する男女差があるはずだと主張する「C.D.」¹⁰¹⁾にたいする批判のなかでも、ヘイズは、男性文人のあいだに「筋骨逞しいジョンソンやヘンデルから、病気がちで虚弱なポープまで」さまざまな身体組織上の違いがみられたことを例にあげ、身体と知性のあいだの対応関係を想定すること自体の不合理を指摘している¹⁰²⁾。

二つ目の違いは、過去の偉大な女性文人たちの受けとめ方である。ウルストンクラフトは、女性全般の「墮落状態」を問題にする立場から、男性と同じように英雄的な業績を残した少数の女性の実例を「一般法則からの例外」とみなし、重きを置こうとしなかった¹⁰³⁾。しかしヘイズは、エルヴェシウスの場合と同様、不利な状況に置かれながら「ホメロス、ニュートン、シェイクスピアにもさほど劣らない」非凡な能力を発揮した女性の実例に注目し、その名前を具体的に10名ほど——古くは「セミラミス、ゼノビア、ボウディッカ」から、より近い時代では「ニュートンの注釈者デュ・シャトレ夫人、ホメロスの翻訳者ゲーシエ、イングランドの歴史家マコーリ」まで——あげている¹⁰⁴⁾。ヘイズにとって彼女たちの存在は、女性の「身体に根差した無能力さ (physical incapacity)」への反証であり、さらには近年のフランスやイギリスにおける文明化の進展を示す証拠でもあった¹⁰⁵⁾。

では、理論的にこのようなことがいえるにもかかわらず、なぜ実際には、女性全体の知的能力を伸ばすような教育環境が与えられないのか。論争のなかでヘイズはその原因を、論敵である「A.B.」や「C.D.」への当てこすりの意味も込めつつ、自分たちの優位性のために闘う男性の「嫉妬深さ」や「偏狭さ」に見いだしている。彼女によれば、「もっとも強い精神的誘因のひとつは、榮譽欲 (the desire of glory)」であり、男性は時代や国を問わず、この動機を追求してきた。しかし、女性はほぼ例外なくそのことが否定され、「伊達男の軽蔑、暴君 (tyrants) の嫉妬、愚か者の嘲笑、銜学者の邪魔」に直面するなかで、「強さと卓越を求める高貴な熱意」が、たえず男性によって抑え込まれてきたという¹⁰⁶⁾。興味深いのは、ヘイズが次のように述べて、この問題を別の次元の支配の問題とつなげて提起していた点である。

君主制にもとづくものであれ、貴族制にもとづくものであれ、封建制にもとづくものであれ、専門性にもとづくものであれ、性差にもとづくものであれ、嫉妬深くつまらない優越性の主張によって、いかに芸術、科学、文芸、道徳、幸福がその歩みを阻まれてきたことか！

つまり、女性の知的能力の開花が妨げられているのは、より広い見地に立てば、一部の人

間だけに他よりも優れていると標榜させる「偏頗な制度 (partial institution)」が原因であり、これが学問と道德の進歩、そしてそれによる社会全体の幸福の増大にとって大きな障害になっているということである¹⁰⁷⁾。この理解には、『精神論』の「これまで道德の進歩を遅らせてきた原因について」という章で、エルヴェシウスが展開した権力者批判、すなわち自身の権力を守るために、「公共の利益」に反して人類全体の「無知と弱さ」を維持しようとする「野心家」「暴君」「狂信者」への批判と相通じるものがある¹⁰⁸⁾。そして、ヘイズが女性の知的改善のために求めるのも、「寛大な方針 (generous policy)」で「誘因と報酬 (incitements and rewards)」を与えるという、道德的な承認を重視したエルヴェシウスの主張を思い起こさせる方策であった¹⁰⁹⁾。

ただしその一方で、エルヴェシウスの女性論について強調しておかなければならないのは、このように男女の知的平等の要求に直結するものとは位相の異なる主張も、彼が同時に行っていた点である。森村によれば、実際の女性についてのエルヴェシウスの言及には、女性の性的魅力を、男性を有徳にするための有効な「手段」とみなす記述が含まれているという¹¹⁰⁾。たとえば『精神論』には、勇猛さで知られる古代スパルタの例を引き、若い女性たちが戦争で臆病な振る舞いをした男性を嘲ったり、手柄を立てた若者を褒め称えたりしたことが、そこでの男性を勇敢にする上で効果的な賞罰になったとする議論がある。つまり、性的快楽には、男性を徳へと駆り立てる力があるということである¹¹¹⁾。こうした見解ゆえに、エルヴェシウスは神学者たちから「道德の壊乱者」と批判されたが、彼は『人間論』でも引き続き、女性の愛を「あらゆる快楽のなかで明らかにもっとも強くはたらきかけ、私たちの魂に最大のエネルギーを伝える」ものと位置づけ、この快楽が徳への報酬になるとする持論を譲ろうとしなかった¹¹²⁾。エルヴェシウスによれば、もし女性が天才、勇気、誠実さにおいて傑出した男性を愛すべきだと思うようになれば、それは「才能と徳 (talents and virtue)」の奨励策になるというのである¹¹³⁾。

この主張は、男性の側からの身勝手な議論のように受け取られてもおかしくない。現にエルヴェシウスの批判者として知られるディドロは、これを「公共の利益」への奉仕という名のもとで、女性から自分自身の身体的所有権を奪う「一種の圧政」とであると表現した¹¹⁴⁾。しかし、思いがけないことにヘイズには、このようなエルヴェシウスの主張を、みずから内面化していたふしがある。ここで想起されるのが、『エマ・コートニーの回想』に登場する、主人公エマがハーリーに宛てて書いた手紙の内容である。すでに述べたように、この手紙のもとになっていたのは、ヘイズ自身がフレンドに送った手紙であったが、そこには次のような記述がある。

有徳で才能のある男性 (a man of virtue and talents) の妻になることは、私のもっとも切実な野望でしたし、それはまた私の榮譽 (glory) となるべきものでした。私は自分自身のことを、そのような男性の信頼と愛情に値する人間であると判断しました。私は彼の営みに合流し、彼の原理をとともに分かち合い、彼の精神の有徳なエネ

ギーを促し、彼の家庭での安らぎを生みだすことができると感じました。……最初に私の賞賛と敬意を呼び起こしたのは、あなたの振る舞いの雅量（magnanimity）であり、あなたの徳でした¹¹⁵⁾。

このなかで雄弁に語られているように、書き手の女性が「あなた」を愛するようになったのは、その徳と才能ゆえであり、そうした有徳で才能のある男性のために生きることこそ、彼女自身の榮譽となるはずであった。これはどう読んでも、エルヴェシウスが女性にたいして求めた役割、つまり男性の才能と徳を引き出す手段としての役割を、みずから引き受けた女性の手になる文章であるといつてよい。これまでのヘイズ研究で、誰もこの一致に気づいていないのが不思議なくらいの顕著な共鳴ぶりである。もしこの手紙が本当にヘイズからフレンドに出されたものであったとすれば、ヘイズは、フレンドへの思いを募らせた1794年ごろから、エルヴェシウスの思想をみずからの感情のなかで「実践」しており、さらにこの小説を書いていた1796年の時点でも、こうしてエルヴェシウスの議論に依拠した自身の愛という情念の表現を、（現実には相手から拒絶されたとはいえ）なおも公にむけて提示する価値のあるものとして認識していたことになる。

実のところ、この小説の執筆と同時期にヘイズが書いた、「ある女性」という名による『マンスリー・マガジン』誌上の二本の論説は、それ自体が、男性の論敵を直接の相手にして、女性の側から彼らの徳と才能を見定め、彼らに道徳的な制裁を与えるパフォーマンスにもなっている。すでに述べたように、女性が男性と同等な知的能力をもつことを認めない男性たちの主張を「嫉妬深さ」と「偏狭さ」によるものとみなすヘイズは、明らかに小馬鹿にした態度で、「A.B.」の主張を「狭量で非哲学的な」ものと形容し、また「C.D.」の議論の「低能さ（imbecility）」を指摘する¹¹⁶⁾。「私たち」という言葉を主語に選んで、ヘイズが語りかけるところによれば、女性が心から望むのは、男性がより高い程度の「真の徳と叡智」をもつことであり、「そのことに私たち自身の幸福がきわめて実質的に（materially）関わっている」。だが、こうして女性が男性のなかに見いだしたいと思っている、より多くの「原理における高潔さ」、「振る舞いにおける雅量」、「制度における叡智」などが確認できなければ、男性が豪語している自身の優位性は、空虚な見せかけでしかないことになる¹¹⁷⁾。ここで「高潔さ」や「雅量」といった言葉でヘイズが含意しているのは、要するに、嫉妬などを抱かずに女性の知的能力の潜在的な高さを認め、その改善への熱意を促そうとする寛大な姿勢のことだろう。逆にいえば、そのような雅量をもって女性を支えてくれる男性にたいしては、女性がみずから喜んで彼の優位性を承認しよう——場合によっては愛を捧げよう——ということでもある。つまり、女性はみずから寛大な男性を賞賛したり、狭量な男性を貶したりすることで、男女の知的平等の実現という効用にむけた徳と叡智を磨くよう男性を方向づけることができるし、そうした性的誘因が十全にはたらけば、おのずと女性の知的能力を伸ばす環境が整えられる——このような道筋を、女性が置かれた状況にたいする当面の打開策として、ヘイズは示していたわけである。

ただし、こうしてミクロな次元で女性が男性を変えていくためには、当然、徳と才能をもつと認められる男性を、女性の側が恋愛対象や結婚相手として自由に選択することができるようでなければならない。1797年3月の『マンスリー・マガジン』に「M.H.」の名前で発表された論説には、そのための条件をマクロな次元で整えるような変革を、社会や政府の側に求める内容が含まれている。女性にだけ「純潔 (chastity)」を求める規範が、社会の不幸と腐敗をもたらしてきたとする主張がそれである。とはいえ、もちろん「放蕩 (libertinism) や粗野な官能」を擁護しようというのではない。ヘイズによれば、大部分の若い女性は、親から経済的に有利になる結婚を期待され、結婚後の依存状態にむけて外見的魅力を磨くといった無内容な教育を受けている。こうして金銭を目的にした「ほとんどデリカシーも選択もない」結婚が失敗にいたるのは当然のことだが、世間の通説では、女性はいったん純潔を失うと「取り返しがつかない」とみなされ、社会から締めだされてしまうため、この「有徳な愛」を欠いた不幸な夫婦関係をそのまま続けるしかない。このように「生計を獲得するために人格をバスターにかけるという不名誉な必要性」から女性が解放されるためには、職業への従事による経済的な独立が女子教育の目的に据えられなければならない¹¹⁸⁾。そのような教育を通じて自立した生き方ができるようになれば、女性は打算から自由になって、みずから愛情を寄せる男性を結婚相手に選ぶことができるというのである¹¹⁹⁾。

この論説の冒頭に、「女性と人間性の権利 (the rights of her sex, and of humanity) の雄弁な擁護者」への言及があることからわかるように¹²⁰⁾、もちろんヘイズの主張には『女性の権利の擁護』と重なる部分がある。ウルストンクラフトは、たしかに純潔を守ることに女性の価値があるとする通説を批判していた¹²¹⁾、女性の経済的独立の重要性を論じてもいた¹²²⁾。しかし、男性の性的欲望の影響力にたいして警戒するウルストンクラフトは、女性の性的欲望についても、それが「神への愛」を媒介としたものでなければならぬと述べるだけで、女性がみずから積極的に男性を選ぶことの意義などは説こうとしなかった。むしろ、この点でヘイズが参照したと考えられるのは、やはり女性に貞節を求める規範自体を相対化したエルヴェシウスの議論である。エルヴェシウスは『精神論』で、性的放縦を罪とみなすモラリストたちへの批判の一環として、結婚に関する世界各地の多様な慣習を取りあげ、女性が何度も男女関係を試したのちに夫を選んだり、嫌いになった夫を見捨てて別の男性と再婚したりする例をあげていた¹²³⁾。こうして女性の側が自由に男性を愛するという現象は、エルヴェシウスにとって、既存の価値規範を白紙に戻した上で、個人のタブーなき幸福追求の可能性を探究するための重要な思考実験の材料になっていたといつてよい¹²⁴⁾。ヘイズはこの論説の結論部分で、ある国が繁栄しているのか衰退しているのかは、その財政状況や対外関係からではなく、「私的な徳と幸福 (private virtue and happiness) の有無からより正確に演繹される」として、政府に「個人の幸福を目的とした手段」としての機能を求めているが¹²⁵⁾、これはエルヴェシウスに由来する、個人の私的な幸福追求に立脚した功利主義の論理を、女性をその主体に据えて受けとめ直

した主張と解釈してよいだろう。こうして論争のなかで、エルヴェシウスの議論をいくつかの文脈から利用することによって、ヘイズは女性の愛という情念を起点とした社会変革のあり方を、独自に構想するにいたったのである。

おわりに

さて、以上のように、女性でありながら「哲学者」になろうとしたヘイズの試みを、どのように捉えたらよいだろうか。

1790年代半ばにヘイズと親しい友人関係にあった、ジョージ・ダイヤー (George Dyer, 1755-1841) という著述家がいる。1792年に『女性の権利の擁護』を一冊ヘイズに送って読むように勧めたのも、また同じころに友人としてヘイズとフレンドが交際する場面によく居合わせたのも彼であったといわれ¹²⁶⁾、じつはかなりのキーパーソンである。ダイヤーは1797年2月6日に書かれたとされるヘイズ宛ての手紙のなかで、彼女のことを気遣いながら、「哲学の殉教者 (a martyr to philosophy) にならないでください。もう少し練習しないと、あなたはきっとそうになってしまうでしょう」と呼びかけた。フレンドとの失恋のことも、『マンスリー・マガジン』誌上の論争のことも、おそらく身近で知っていたダイヤーの目には、ヘイズがあまりにもむきになって、無理をして哲学にのめりこんでいるように見えたのかもしれない。ダイヤーは「もう少し馬鹿に (a little more foolish)」なって、「愚か者、伊達男、悪党」たちがいるこの世界を「もっと忍耐強く」眺めるようにとヘイズに助言した¹²⁷⁾。もっと気楽に構えないと、哲学がヘイズを生きづらくさせてしまうということだろう。

たしかに「精神的能力は幸福をもたらすのか？」という題名で、1797年5月の『マンスリー・マガジン』に載ったヘイズの論考からは、知的能力を鍛えることの帰結について、ヘイズ自身が考えあぐねている様子が見える。それまでの「J.T.」や「A.B.」「C.D.」たちとの論争のなかにみられた強気な姿勢からは一転して、ヘイズは、逆境や失望や不運によって強い情念が生まれ、情念の格闘から能力が引きだされるのだとすれば、その「勝利」の代償はあまりにも大きいのではないかと問いかける。だがその一方で、知性をもたらす快楽は、その苦痛と釣り合うものであり、精神を陶冶することでその人の性格には「威厳と独立性」が付与されるとも述べており、ヘイズ自身の立場は揺らいでいるように見える¹²⁸⁾。いずれにせよ、これまでの歴史を振り返れば、たとえば金銭的利害を重視する商業国家、党派的特権や人為的区別をもとに人を評価する貴族制や封建制、また精神を拘束して能力を切り売りさせる君主政や専政のように、それぞれの体制下で「知性力 (intellectual powers)」が抑圧されたり歪められたりしてきたことは間違いがなく、「共和国」の場合にどうなるのかも、まだ経験をもとに判断するには早すぎるとヘイズは論じる¹²⁹⁾。つまり、当面の現状では、知的能力を伸ばすためには、個人の幸福が犠牲になると考えざるをえないということである。ここでは明示されていないものの、さまざまな支

配の問題を「偏頗な制度」として束ねて捉えていた以前の論考と同じように、もしヘイズがこれらと並ぶかたちで「性差にもとづく」支配体制を想定に入れていたとすれば、その主張の裏には、男性優位の世界で女性として知的能力の向上に努めてきた自身の格闘にたいする、ある種の徒労感を読み取るべきなのかもしれない。

ダイヤーが心配していたように、「逆境」に意味を見いだすという点で、「哲学の殉教者」になろうとする身振りがヘイズにみられることは、たしかに否定できない。とはいえ、彼女が生半可な知識で、本来女性のものではない哲学の世界にうっかり足を踏み入れ、無理を重ねて挫折をし、結局のところ哲学の犠牲者になってしまった、という結論は、本稿に似つかわしいものであるとは思われない。少なくとも『マンスリー・マガジン』誌上でのヘイズの議論をみるかぎり、彼女は女性としての個人的な経験をもとに、その経験を説明することができる哲学の言葉を探りだし、論争を重ねるなかで、独自の哲学的思想をかたちづくることになんかの程度まで成功していたと考えられるからである。本稿が明らかにしてきたように、その思想は、エルヴェシウス哲学の独創的な受容によって、ゴドウィンの哲学とも、またウルストンクラフトの主張とも異なるオリジナリティを示しうるものとなっていた。それは、ヘイズが「もう少し馬鹿に」なる道を選んでいたら、見通すことさえできない境地であっただろう。『マンスリー・マガジン』誌上での論争は、こうしてヘイズに「女性哲学者」としての自立を果たさせる重要な契機となっていたのである。

注

- 1) たとえば、邦訳された書籍としては、次のものがある。マーガレット・アーリク（上平初穂・上平恒・荒川泓訳）『男装の科学者たち——ヒュパティアからマリー・キュリーへ』北海道大学出版会、1999年；マルヨ・T・ヌルミネ（日暮雅通訳）『才女の歴史——古代から啓蒙時代までの諸学のミューズたち』東洋書林、2016年；レイチェル・イグノトフスキー（野中モモ訳）『世界を変えた50人の女性科学者たち』創元社、2018年。
- 2) Rebecca Buxton and Lisa Whiting (eds.), *The Philosopher Queens: The lives and legacies of philosophy's unsung women*, Unbound, 2020, p.4. (向井和美訳『哲学の女王たち——もうひとつの思想史入門』晶文社、2021年、15頁。)
- 3) 田村哲樹は、現代でも研究の日常生活においては、「力強さ」「瞬発力」「厳しさ」など、往々にして「男らしい」振る舞いとされるものに価値が置かれる傾向があるとして、女性の場合にはそれを実践することが難しいと指摘している。田村哲樹「『男性問題』としての女性研究者問題」『GRL Studies』(名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ) 2号 (2020年)、56頁。
- 4) J.M.S. Tompkins, 'Mary Hays, Philosophess', in Tomkins, *The Polite Marriage*, Cambridge University Press, 1938.
- 5) ヘイズに関して日本語で読むことのできる文献としては、次のものがある。梅垣千尋「メアリ・ヘイズ」『英国・ヨーロッパ女性伝記大事典』について「復刻版 Mary Hays, *Female Biography* (1803) 解説、ユーリカ・プレス、2004年；細川美苗「メアリ・ヘイズの『エマ・コートニーの回顧録』における私信の政治学」『松山大学論集』19号 (2007年)；細川美苗「感

情と理性の間——メアリ・ヘイズ『エマ・コートニーの回顧録』（1796）』18世紀女性作家研究会編『長い18世紀の女性作家たち——アフラ・ベインからマライア・エッジワースまで』英宝社、2009年；梅垣千尋『女性のための歴史とフィクション——メアリ・ヘイズが試みたジャンルの再編』見市雅俊編『近代イギリスを読む——文学の語りと歴史の語り』法政大学出版社、2011年。なお本稿は、ヘイズに関する基本的な説明において、これらの既発表の拙稿と一部重なるところがある。

- 6) ヘイズの研究史において、ゴドウィンの「門徒」という位置づけをもっとも早く示したのは、M. Ray Adams, 'Mary Hays, Disciple of William Godwin', *PMLA* (Modern Language Association), vol.55 (1940) である。
- 7) ヘイズとウルストンクラフトの関係に焦点をあてた論文として、Gina Luria Walker, 'The Two Marys: Hays Writes Wollstonecraft', in Enit Karafili Steiner (ed.), *Called to Civil Existence: Mary Wollstonecraft's A Vindication of The Rights of Woman*, Rodopi, 2014を参照。
- 8) それ以前に面識のあったゴドウィンとウルストンクラフトをヘイズがふたたび引き合わせたのは、1796年1月8日のことだった。William St Clair, *The Godwins and the Shelleys: The Biography of a Family*, Faber and Faber, 1989, p.157. ゴドウィンの側からみた女性著述家たちとの関わりの意味について、詳しくは、Mark Philp, *Radical Conduct: Politics, Sociability and Equality in London 1789-1815*, Cambridge University Press, 2020, pp.123-144を参照。
- 9) サミュエル・テイラー・コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) は、ロバート・サウジー (Robert Southey, 1774-1843) 宛ての書簡で、「ヘイズ女史の知性 (Miss Hayes' intellect) について、君のように高く評価できない」と述べ、ヘイズの著作にみられる「醜く、ペティコートをつけたもの (a thing, ugly and petticoated) を耳にする」のは「我慢ならない」と書いていた。Letter from Samuel Taylor Coleridge to Robert Southey, January 25, 1800, in Earnest Hartley Coleridge (ed.), *Letters of Samuel Taylor Coleridge*, William Heinemann, 1895, vol.1, p.234. この背景には、コールリッジとサウジーの友人であったチャールズ・ロイド (Charles Lloyd, 1775-1839) という若い男性著述家が、自分にたいして寄せられたヘイズの恋心を公言し、醜聞を流したという出来事があった。Gina Luria Walker, *Mary Hays (1759-1843): The Growth of a Woman's Mind*, Ashgate, 2006, pp.199-200.
- 10) Marilyn L. Brooks (ed.), *Mary Hays, Memoirs of Emma Courtney*, Broadview Press, 2000, pp.155, 162. 強調は原文のイタリック。
- 11) フレンドはヘイズ宛ての手紙で、「ユーセビアは世界にたいして、彼女がその時間と才能 (talents) を最良の仕事のために捧げたことを証明した」として、その「婉曲的な言葉で表現された健全な理性のはたらき (sound reasoning) にみられる多くの公明性 (candour)」を賞賛していた。Letter from William Frend to Mary Hays, April 16, 1792, in Marilyn L. Brooks (ed.), *The Correspondence (1779-1843) of Mary Hays, British Novelist*, The Edwin Mellen Press, 2004, p.270.
- 12) フレンドは、1780年代末ごろから英国国教会の39箇条の教義への宣誓を義務づける大学当局にたいする抗議運動を展開していた。なお、1793年にカレッジが下した処分については、大学当局がその決定手続きに瑕疵があるとしてフレンドにフェローとしての身分を認め、独身であり続けるかぎり、年間150ポンドの収入を保証していた。Frida Knight, *University*

- Rebel: The Life of William Frend (1757-1841)*, Victor Gollancz, 1971, p.165; Walker, *Mary Hays*, p.112.
- 13) 正確な時期については研究者のあいだでも見解が分かれ、ウォーカーはこの破局を「1796年の初頭」としているが、ウェランは「1795年12月」としている。Walker, *Mary Hays*, p.116; Timothy Whelan, 'Mary Hays and Dissenting Culture, 1770-1810', *The Wordsworth Circle*, vol.50 (2019), p.322.
- 14) その後、ふたたび友人としての交際をフレンドに申し出たヘイズは、小説を書くために自分が送った手紙の返却を彼に求めたが、応じられた形跡はない。Letter from Mary Hays to William Godwin, [February 6, 1796,] in Brooks (ed.), *The Correspondence*, pp.430-431; Walker, *Mary Hays*, p.117.
- 15) この往復書簡がニューヨーク公共図書館のプフォルツハイマー・コレクション (Pforzheimer Collection) に加わった経緯については、自身のヘイズ研究の足跡を振り返ったウォーカーの次の論文に詳しい。Gina Luria Walker, "I Sought & Made to Myself an Extraordinary Destiny", *Women's Writing*, vol.25 (2018), pp.126-127.
- 16) この手紙でヘイズは、友人のフレンドが『政治的正義』を、「ロックの有名な『統治 [二] 論』と同じくらい大きな変化を我が国の政治感情 (political sentiments) にもたらす」ものとして自分に勧めたと記している。Letter from Mary Hays to William Godwin, October 14, 1794, in Brooks (ed.), *The Correspondence*, pp.382-384.
- 17) ゴドウィンが当時、執筆の仕事で多忙であったため、ヘイズの手紙にたいして口頭で回答するという形式をとっていた。ブルックスによれば、ボドリアン図書館に所蔵されているゴドウィンの日記には、19回にわたってヘイズが彼の家を訪問していたことを示す記録があるという。Brooks (ed.), *The Correspondence*, pp.364-365.
- 18) Letter from Mary Hays to William Godwin, January 11, 1796, in Brooks (ed.), *The Correspondence*, p.423.
- 19) Timothy Whelan, 'Mary Hays and Dissenting Culture', pp.320-321.
- 20) Letter from Mary Hays to William Godwin, February 9, 1796, in Brooks (ed.), *The Correspondence*, p.431.
- 21) Letter from Mary Hays to William Godwin, [February 6, 1796,] in Brooks (ed.), *The Correspondence*, pp.430-431. この手紙には11月という記載があるが、1796年2月6日の消印が押されている。
- 22) Letter from Mary Hays to William Godwin, May 11, 1796, in Brooks (ed.), *The Correspondence*, p.457.
- 23) とくにエマの性的情念をめぐるのは、ヘイズがそれを主人公の問題点として提示したという解釈と、むしろより積極的に、女性の性欲に価値を置く立場を示したという解釈とに分かれる。こうした研究史上の解釈の違いについては、Deborah Weiss, *The Female Philosopher and Her Afterlives: Mary Wollstonecraft, the British Novel, and the Transformations of Feminism, 1796-1811*, Palgrave Macmillan, 2017, pp.91-92を参照。
- 24) Brooks (ed.), *Mary Hays, Memoirs of Emma Courtney*, p.36.
- 25) もちろん、文学研究と思想史研究を明確に分けて捉えるべきではないだろう。文学研究において、「唯物論 (materialism)」と「宿命論 (necessitarianism)」という枠組みの継承という点から、また啓蒙期における「自律 (autonomy)」概念への内在的批判という点から『エ

- マ・コートニーの回想』を分析した優れた研究として、次の二点の論文がある。Scott A. Nowka, 'Materialism and Feminism in Mary Hays's *Memoirs of Emma Courtney*', *European Romantic Review*, vol.18 (2007); Brian Michael Norton, 'Emma Courtney, Feminist Ethics, and the Problem of Autonomy', *The Eighteenth Century*, vol.54 (2013).
- 26) ウォーカーは近年、『エマ・コートニーの回想』以降のヘイズの著述活動についても精力的に調査を進め、ヘイズが1803年に出版した『女性評伝集』を軸とした国際的な研究プロジェクトを主導し、次のような論文集を刊行している。Gina Luria Walker (ed.), *The Invention of Female Biography*, Routledge, 2017; Mary Spongberg and Gina Luria Walker (eds.), *Mary Hays's 'Female Biography': Collective Biography as Enlightenment Feminism*, Routledge, 2019.
- 27) Timothy Whelan, 'Mary Hays and Dissenting Culture'; Timothy Whelan, 'Mary Hays and Henry Crabb Robinson', *The Wordsworth Circle*, vol.46 (2015). これらは、ヘイズの友人であったヘンリ・クラブ・ロビンソン (Henry Crabb Robinson, 1775-1867) の書簡にもとづく研究である。ウェランは、ヘイズ研究のHPを運営してその成果をインターネット上で公にしている。<https://www.maryhayslifewritingscorrespondence.com/> ヘイズの書簡やヘイズに言及した書簡の文章がその書籍化の編集段階でいかに削除されたのかについては、先にあげた Walker, "I Sought & Made to Myself an Extraordinary Destiny", pp.127-129, 134-138を参照。
- 28) ポリンは、サウジーが1797年3月13日付けの友人宛ての手紙のなかで、その数日前に会ったヘイズについて次のように記していることを根拠に、彼女の寄稿の事実を確証している。「彼女は『マンスリー・マガジン』にM.H.という署名で文章を書いていて、ときどきそこでエルヴェシウスについて馬鹿げたこと (nonsense) を書いている。」Burton R. Pollin, 'Mary Hays on Women's Rights in the *Monthly Magazine*', *Études Anglaises*, vol.24 (1971), p.271. なお、サウジーは同じ手紙で、ヘイズのことを「ゴドウィン主義者 (a Godwinite)」と表現している。Joseph Cottle, *Reminiscences of Samuel Taylor Coleridge and Robert Southey*, Houlston and Stoneman, 1848, p.203.
- 29) ウォーカーは次の報告をしているが、活字化されていない。Gina Luria Walker, 'Benevolent Misogyny: Mary Hays in *The Monthly Magazine*', Places of Exchange: Magazines, Journals and Newspapers in British and Irish Culture, 1688-1945 Conference, University of Glasgow, July 27, 2002. この情報については、Gina Luria Walker, "Sewing in the Next World": Mary Hays as Dissenting Autodidact in the 1780s', *Romanticism on the Net*, no.25 (2002), <https://www.erudit.org/en/journals/ron/2002-n25-ron437/006013ar/> の引用文献一覧を参照。
- 30) Walker, *Mary Hays*, p.136. ウォーカーは、少なくともこの研究書ではエルヴェシウスの著作を詳しく検討しておらず、二次文献に依拠しているだけである。
- 31) Marilyn L. Brooks, 'A Critical Study of the Writings of Mary Hays, With an Edition of her Unpublished Letters to William Godwin', Unpublished Doctoral Thesis, Queen Mary & Westfield College, University of London, 1995, pp.88-95.
- 32) 『マンスリー・マガジン』について、詳しくは次のものを参照。Geoffrey Carnall, 'The *Monthly Magazine*', *Review of English Studies*, vol.5 (1954); Richard Len McGuire, 'The *Monthly Magazine* (1796-1843): Politics and Literature in Transition', Ph.D. dissertation, Rice University, 1968; Kenneth Curry, 'Monthly Magazine, The', in Alvin Sullivan (ed.),

- British Literary Magazines*, Greenwood Press, 1983, vol.2.
- 33) Marilyn Butler, 'Culture's Medium: the role of the review', in Stuart Curran (ed.), *Cambridge Companion to British Romanticism*, Cambridge University Press, 2006, p.126.
- 34) 'Preface', *The Monthly Magazine*, no.1 (February 1796), vol.1, pp.iii-iv. 序文には文責が示されていないが、主語に「この作品の管理人たち (Conductors)」という複数形が用いられていることから、フィリップス以外にも複数の関係者が編集部を務めていたと考えられる。なお、この月刊誌は約半年分ごとに合本して巻数がつけられ、2巻(約1年間)ごとに序文が付され、頁数が振り直されている。また、記事には冒頭に題名が付されているものと付されていないものがあるが、以下、題名が付されていないものにはヘッダー部分に編集部がつけた短い概要を題名とみなして記載する。
- 35) Pamela Clemit and Jenny McAuley, 'Phillips, Sir Richard (1767-1840)', *Oxford Dictionary of National Biography*, version of 11 June 2020.
- 36) 3巻の序文では明確に、この月刊誌が「人類の進歩的な改善」を目的としていること、また「何らかの一連の意見だけを不公平に信奉」するのではなく、「理性的かつリベラルに表明されれば、相対立する両方の側の議論を自由に認めてきた」ことが強調されている。'Preface', July 1797, *The Monthly Magazine*, vol.3.
- 37) 「J.T.」は、サマセットのトーントンに本拠を置いていたユニテリアンの牧師、ジョシュア・トゥールミン (Joshua Toulmin, 1740-1815) であったとするのが通説のようである。Curry, 'Monthly Magazine', p.316; Whelan, 'Mary Hays and Henry Crabb Robinson', pp.180-181.
- 38) エドモンド・パーク (半澤孝磨訳) 『(新装) フランス革命の省察』みすず書房、1997年、109、271頁。
- 39) ノリッジで1794年から95年にかけて刊行された急進的な定期刊行物『キャビネット』には、エルヴェシウスの文章の抄訳が3点掲載されていた。Penelope J. Corfield, 'Contributors to *The Cabinet*, vols.1-3 (Norwich and London, 1795)', in Penelope J. Corfield and Chris Evans (eds.), *Youth and Revolution in the 1790s: Letters of William Pattison, Thomas Amyot and Henry Crabb Robinson*, Alan Sutton, 1996, pp.191-192. この『キャビネット』については、梅垣千尋「メアリ・ウルストンクラフトは『キャビネット』に寄稿したか?——1790年代イギリスの急進主義・慈善論・非国教徒サークル〈前〉〈後〉」『一橋論叢』128巻2号(2002年)、129巻2号(2003年)も参照。
- 40) 谷川多佳子「デカルトと想像力——身体と知性のあいだで」『思想』807号(1991年)、139頁。
- 41) J.T., 'Remarks on Helvetius', *The Monthly Magazine*, no.1 (February 1796), vol.1, pp.26-29.
- 42) このコラムは匿名であったが、14号まではユニテリアンのウィリアム・エンフィールド (William Enfield, 1741-1797) が執筆していたと考えられている。McGuire, 'The *Monthly Magazine*', p.45. エンフィールドは、当時もっとも有名な非国教徒の教育機関のひとつであったウォリントン・アカデミーで教師を務めたことがあり、1790年代にはノリッジのオクタゴン礼拝堂の牧師となっていた。R. K. Webb, 'Enfield, William (1741-1797)', *Oxford Dictionary of National Biography*, 2004.
- 43) 'The Enquirer, no.I. Question I. Ought the Freedom of Enquiry to be restricted?', *The Monthly Magazine*, no.1 (February 1796), vol.1, pp.2-5; 'The Enquirer, no.II. Question: Is it

- desirable that the State should interface in the Education of Youth?', *The Monthly Magazine*, no.2 (March 1796), vol.1, pp.93-96.
- 44) 'The Enquirer, no.III. Question: Are Literary and Scientific Pursuits suited to the Female Character?', *The Monthly Magazine*, no.3 (April 1796), vol.1, pp.181-184. このコラムについてウォーカーは、書き手とされるエンフィールドが、彼の周辺の女性たち——「マーガレッタ」はアナ・レティシア・バーボールド (Anna Laetitia Barbauld, 1743-1825)、「ソフィア」はアメリア・アルダーソン (Amelia Alderson, 1769-1853)、「イライザ」はヘイズ——をモデルにしていたのではないかと推測している。Walker, *Mary Hays*, p.167.
- 45) A.B., 'Women inferior to Men', *The Monthly Magazine*, no.4 (May 1796), vol.1, p.290.
- 46) なお、『マンスリー・マガジン』に掲載されたヘイズの論説は、ブルックスとウォーカーがそれぞれ編んだ次の版に再掲されている。Brooks (ed.), *Mary Hays, Memoirs of Emma Courtney*; Gina Luria Walker (ed.), *The Idea of Being Free: A Mary Hays Reader*, Broadview, 2006. 以下では、初出の書誌情報と合わせて各版の頁数も記す。
- 47) このデビュー作で、ヘイズは、みずから「若く、教養がなく、他の言語を習得していない女性」であって、「論争的な武器を扱うのに適していない」ことを強調していた。Eusebia [Mary Hays], *Cursory Remarks on an Enquiry into the Expediency and Propriety of Public Worship*, London: T. Knott, 1792, pp.3,21. このような「無駄な謙遜」に満ちたヘイズの文章にたいして、バーク批判の書『人間の権利の擁護』(1790年)の第二版以降、実名を明かして男性と対等に論争する姿勢をとっていたウルストンクラフトが、手紙のなかで苛立ちを露わにしていたことについては、梅垣千尋『『女性の権利の擁護』と18世紀末イングランドの理性的非国教徒』『一橋大学社会科学古典資料センター年報』23号 (2003年)、54頁を参照。
- 48) 18世紀末のいわゆる理性的非国教徒のあいだで、女性の知的活動や論争参加をむしろ歓迎する雰囲気があったことについては、梅垣、同論文を参照。ウォーカーは、ヘイズが1780年代に師と仰いでいた非国教徒の牧師、ロバート・ロビンソン (Robert Robinson, 1735-1790) から「論争を特権として受け入れる」ことを学んでいたと指摘している。Walker, *Mary Hays*, p.161.
- 49) M.H., 'Reply to J.T. on Helvetius', *The Monthly Magazine*, no.5 (June 1796), vol.1, pp.385-387; Walker (ed.), *The Idea of Being Free*, pp.232-236.
- 50) J.T., 'Answer to M.H. on Helvetius', *The Monthly Magazine*, no.7 (August 1796), vol.2, pp.521-523.
- 51) S.R., 'On the Philosophy of Helvetius', *The Monthly Magazine*, no.8 (September 1796), vol.2, p.629.
- 52) A Woman, 'Remarks on A.B.'s Strictures on the Talents of Women', *The Monthly Magazine*, no.6 (July 1796), vol.2, pp.469-470; Brooks (ed.), *Mary Hays, Memoirs of Emma Courtney*, pp.261-264.
- 53) ヘイズの「A.B.」批判が出た号の翌月にただちに掲載されていることから、ポリンは「C.D.」がこの月刊誌の関係者だろうと推測している。Pollin, 'Mary Hays on Women's Rights', p.276.
- 54) C.D., 'Observations on the Talents of Women', *The Monthly Magazine*, no.7 (August 1796), vol.2, pp.526-527.
- 55) A.B., 'Talents of Women', *The Monthly Magazine*, no.9 (October 1796), vol.2, pp.696-697.
- 56) Philogynes, 'Talents of Women equal to Men', *The Monthly Magazine*, no.8 (September

- 1796), vol.2, pp.611-612.
- 57) A Woman, 'The Talents of Women', *The Monthly Magazine*, no.10 (November 1796), vol.2, pp.784-787; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, pp.264-270.
- 58) [The Writer of the Essay in defence of the talents of women], 'Erratum', *The Monthly Magazine*, no.11 (December 1796), vol.2, p.850.
- 59) C.D., 'Quotation from Hume', *The Monthly Magazine*, no.12 (January 1797), vol.3, p.4.
- 60) The Editor of the *Monthly Magazine*, 'Hume', *The Monthly Magazine*, no.13 (February 1797), vol.3, p.98.
- 61) L., 'Defence of Lawyers', *The Monthly Magazine*, no.12 (January 1797), vol.3, pp.12-13.
- 62) M.H., 'Defence of Helvetius', *The Monthly Magazine*, no.12 (January 1797), vol.3, pp.26-28; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, pp.270-275. この論説には、原則にたいする例外について説明している箇所、「品格ある法律家」と呼ばれる寄稿者への言及があり、同じ号に載っていた「L.」の文章の内容を、すでに刊行以前にヘイズが読んでいたことが推察される。ヘイズが編集部と近い関係にあったことを裏づける証拠とみなしてよいだろう。Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.274.
- 63) J.T., 'Reply to M.H. on Helvetius', *The Monthly Magazine*, no.15 (April 1797), vol.3, p.265. この記事の冒頭で「J.T.」は、「女性の能力に関する論争の打ち切り」の様子から、編集部がエルヴェシウスに関する長い論争を好んでいないと述べているが、これは明らかに「M.H.」が「ある女性」と同一人物であることが14号で判明したことを受けての記載だろう。
- 64) M.H., 'Improvements Suggested in Female Education', *The Monthly Magazine*, no.14 (March 1797), vol.3, pp.193-195; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, pp.275-279.
- 65) M.H., 'Are Mental Talents Productive of Happiness?', *The Monthly Magazine*, no.16 (May 1797), vol.3, pp.358-360; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, pp.279-284.
- 66) ヘイズは英訳版を読んでいたと考えられるため、本稿では英訳版のみを用いる。なお、『精神論』の記者は不明で、『人間論』はウィリアム・フーパーという人物による翻訳である。
- 67) Marilyn L. Brooks, 'Introduction', to Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.22.
- 68) Letter from Mary Hays to Elizabeth Hays, n.d. この手紙をブルックスは1796年のものとしているが、ウォーカーは1794年のものとしている。Brooks (ed.), *The Correspondence*, p.481; Walker (ed.), *The Idea of Being Free*, p.216. またブルックスは、ヘイズがエルヴェシウスの著作を「1780年代のどこかの時点で知ようになった」と述べているが、ウォーカーは、史料的な根拠がないとしてこの説を批判している。Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.22; Walker, "Sewing in the Next World", note 5.
- 69) Letter from Mary Hays to William Godwin, December 7, 1794, in Brooks (ed.), *The Correspondence*, p.386.
- 70) 『政治的正義』におけるエルヴェシウスの位置づけについては、Mark Philp, *Godwin's Political Justice*, Cornell University Press, 1986, pp.41-50を参照。
- 71) Letter from Mary Hays to William Godwin, March 1, 1796, in Brooks (ed.), *The Correspondence*, p.438.
- 72) Brooks, 'A Critical Study of the Writings of Mary Hays', ch.3; Brooks, 'Introduction', to

- Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, pp.22-24.
- 73) William Godwin, *An Enquiry concerning Political Justice, and its Influence on General Virtue and Happiness*, London: G.G.J. and J. Robinson, 1793, vol.1, pp.82-83. なお、ゴドウィンは1796年の第2版ではこのジェンダーを変更し、自分の兄弟か父親か恩人がフェスロンの従者であったという想定で選択を行う内容にしている。William Godwin, *An Enquiry concerning Political Justice, and its Influence on General Virtue and Happiness*, 2nd edition, London: G.G.J. and J. Robinson, 1796, vol.1, pp.128-129.
- 74) Letter from Mary Hays to William Godwin, February 9, 1796, in Brooks (ed.), *The Correspondence*, p.431. この手紙には2月9日の消印が押されているが、ヘイズ自身は1月10日という日付を記している。また別の手紙（日付はないが、おそらく同じ月に書かれたもの）では、「集合的にみた人類というものは、私にとっては抽象です。それは私の理解力のなかに浮かんでいますが、私の心には届きません！」とも書いている。Brooks (ed.), *The Correspondence*, p.434. これらの手紙の背景となっているゴドウィンとの意見の相違について、詳しくは Brooks, 'A Critical Study of the Writings of Mary Hays', pp.68-70を参照。
- 75) Brooks, 'A Critical Study of the Writings of Mary Hays', ch.4; Brooks, 'Introduction', to Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, pp.24-29.
- 76) M.H., 'Defence of Helvetius', p.26; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.270. 強調は原文のイタリック。二点目についてはヒュームの言明として述べられているが、典拠は示されていない。
- 77) この焚書事件について、詳しくは、森村敏己「エルヴェシウスと『精神論』事件（1758-1759）」『一橋大学社会科学古典資料センター』12号（1992年）を参照。
- 78) Helvetius, *A Treatise on Man, His Intellectual Faculties and His Education*, translated by W. Hooper, London: W. Law and G. Robinson, 1777, vol.1, p.93. (根岸国孝訳『世界教育学選集』人間論』明治図書、1966年、61頁。) 強調は原文のイタリック。なお、この日本語訳は抄訳であるため、以下では訳出された部分のみ頁を示す。訳文は、かならずしもこの訳書によらない。
- 79) 森村敏己『名誉と快楽——エルヴェシウスの功利主義』法政大学出版局、1993年、3頁。
- 80) A Woman, 'Remarks on A.B.'s Strictures on the Talents of Women', p.470; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, pp.263. これは女性の知的能力をめぐる論争に関わる論考からの引用であるが、エルヴェシウスの擁護との論点の重複がみられることは明らかだろう。
- 81) M.H., 'Reply to J.T. on Helvetius', p.387; Walker (ed.), *The Idea of Being Free*, p.234.
- 82) M.H., Ibid., p.387; Walker (ed.), Ibid., p.235.
- 83) M.H., 'Defence of Helvetius', p.28; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.275. 強調は原文のイタリック。
- 84) M.H., 'Reply to J.T. on Helvetius', p.386; Walker (ed.), *The Idea of Being Free*, p.233.
- 85) M.H., 'Defence of Helvetius', pp.27-28; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, pp.273-274. 強調は原文のイタリック。
- 86) 森村『名誉と快楽』、95-100、116-121、150-153、170-178頁。なお、英語圏のヘイズ研究において、これまでエルヴェシウスの受容に関する分析が深められてこなかった原因のひとつは、森村の研究ほどに包括的で体系的なエルヴェシウス研究が英語圏にみられなかったこと

にあるように思われる。

- 87) M.H., 'Reply to J.T. on Helvetius', pp.386-387; Walker (ed.), *The Idea of Being Free*, pp.234-236.
- 88) M.H., 'Defence of Helvetius', p.26; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.271.
- 89) Helvetius, *A Treatise on Man*, vol.1, p.358. なお、ブルックスの指摘によれば、ゴドウィン は『政治的正義』の初版で「逆境は、そこで非凡な徳がかたちづくられるはずの学校である」という通説に言及していたが、1796年の第2版（実質的には1795年のうちに改訂されたもの）では、こうした発想が抑圧、強制、不正義につながるとして、明確に「逆境」の意義を否定したという。Brooks, 'A Critical Study of the Writings of Mary Hays', p.62. ゴドウィンによる『政治的正義』の改訂作業について、詳しくは、Philp, *Godwin's Political Justice* を参照。
- 90) ブルックスによれば、ヘイズはすでに1779年の時点から、当時の恋人への手紙のなかで、「感受性 (sensibility) に溢れた魂」がその感情を洗練させる場として、「逆境という学校」を肯定的に捉える見方を示していたという。Brooks, 'A Critical Study of the Writings of Mary Hays', pp.59-60.
- 91) ヘイズは、ゴドウィン宛ての手紙のなかでこのことを何度も訴えていた。たとえば、次のようなものがある。「女性はみじめで抑圧され、無力です。打ちひしがれているのに、さらに侮辱されます。そんな女性になぜ独立を求めるのですか？自然ではなく、社会の呪われた野蛮な法律が女性の独立を拒んでいるというのに？」(1796年2月6日の手紙)「あなたは哲学者であり、第一級の才能をもつ男性です。あなたの書いたものは後世にも生き続け、そのことを見越していれば、もし現在の迫害と不正義に遭遇したとしても、慰めを得られることでしょう。私は女性です。つまり私がいいたいのは、教育が私に性にもとづく性格を与えてきたということです。たしかに……私はものを考え、書き、理性をはたらかせ、男性や学者たちと会話することができますし、多くのくだらない女性的な偏見を軽蔑することができます。けれども、私は立法者や世界の改革者になるような才能をもっていませんし、険しい高さにまで自分の身を起こすのには不適格な、臆病なデリカシーと女性の欠点をいまだにもっています。」(日付はないが、1796年2月に書かれたと想定される手紙) Brooks (ed.), *The Correspondence*, pp.426,434.
- 92) Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.30. ヘイズは初対面のウルストンクラフトについて、「ラファーターが1000万人に一人と称する天賦の才 (genius)」をもち、「彼女自身の体系の真の門徒 (a true disciple) である」という賞賛の言葉を記していた。Anne F. Wedd (ed.), *The Love-Letters of Mary Hays (1779-1780)*, Methuen, 1925, p.5. この文章は、ヘイズの姪の子孫 (great-great-niece) にあたるウェッドが所有していたヘイズの日記からの引用である可能性が高い。Brooks (ed.), *The Correspondence*, p.298.
- 93) Mary Hays and Elizabeth Hays, *Letters and Essays, Moral, and Miscellaneous*, London: T. Knott, 1793, pp.v-vi.
- 94) たとえば、A Woman, 'Remarks on A.B.'s Strictures on the Talents of Women', p.470; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.263および A Woman, 'The Talents of Women', p.786; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.268を参照。
- 95) たとえば、A Woman, 'Remarks on A.B.'s Strictures on the Talents of Women', p.470;

- Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.263および M.H., 'Improvements Suggested in Female Education', p.194; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, pp.276-77を参照。
- 96) 森村敏己「フランス啓蒙の女性論——エルヴェシウスを中心に」お茶の水女子大学ジェンダー研究所セミナー、2019年2月15日。
- 97) Helvetius, *A Treatise on Man*, vol.1, p.153. (根岸訳、96頁。)
- 98) Helvetius, *Ibid.*, vol.1, p.153. (訳書では、固有名詞が省略されている。) 別のところでエルヴェシウスは、女子教育の不備や矛盾についても指摘している。Helvetius, *Ibid.*, pp.44-45. (根岸訳、43頁。)
- 99) もっとも、このような主張は、エルヴェシウスだけの専売特許ではない。男女の身体上の差異が精神における差異の根拠にならないとする主張は、より古くはカルテジアンのパールン・ド・ラ・パールに見いだすことができる。フランソワ・パールン・ド・ラ・パール (古茂田宏・今野佳代子・佐々木能章・佐藤和夫・仲島陽一訳)『男女両性論』法政大学出版局、1997年。ただし、ヘイズがこの100年以上前の著作の存在を知っていたとは考えづらく、その証拠もない。
- 100) Mary Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Woman*, in Janet Todd and Marilyn Butler (eds.), *The Works of Mary Wollstonecraft*, William Pickering, 1989, vol.5, pp.74, 95. (白井堯子訳『女性の権利の擁護』未来社、1980年、24、57頁。) ただし、もちろんウルストンクラフトは、環境や習慣によって「自然が意図していた以上に」女性の「か弱さ」がつくりだされてしまうことを批判していた。ウルストンクラフトの性差観について、詳しくは、梅垣千尋『女性の権利を擁護する——メアリ・ウルストンクラフトの挑戦』白澤社、2011年、75-84頁を参照。
- 101) C.D., 'Observations on the Talents of Women', p.527.
- 102) A Woman, 'The Talents of Women', p.785; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, pp.266-67.
- 103) Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Woman*, pp.145-146. (白井訳、144頁。) なお、ウルストンクラフトはここで、「男性的な教育を受けて勇気と決断力を身につけた」女性として、「サッフォー、エロイズ、マコーリ夫人、ロシア女帝、デオン夫人など」をあげている。
- 104) A Woman, 'Remarks on A.B.'s Strictures on the Talents of Women', p.470; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.264. この言及には、もともと「A.B.」がその論考で「女性のホメロス、ヴェルギリウス、バイコン、ニュートン」がいないと述べていたことへの反論という意味合いもある。A.B., 'Women inferior to Men', p.290.
- 105) A Woman, 'The Talents of Women', p.786; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.268. なお、ヘイズは1803年に全6巻の長大な『女性評伝集 (Female Biography)』を出版することになるが、これはイギリスにおいて初の「女性のよる、女性のための、女性についての」評伝集であった。詳しくは、梅垣「メアリ・ヘイズ『英国・ヨーロッパ女性伝記大事典』について」を参照。
- 106) A Woman, 'The Talents of Women', p.786; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, pp.268-269.
- 107) A Woman, 'Remarks on A.B.'s Strictures on the Talents of Women', p.470; Brooks (ed.),

- Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.264.
- 108) Helvetius, *De L'Esprit: or, The Essays on the Mind, and its Several Faculties*, London: printed for the Translator, 1759, p.112. 森村『名誉と快楽』、117-119頁。
- 109) A Woman, 'The Talents of Women', p.786; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.268. 強調は原文のイタリック。
- 110) 森村「フランス啓蒙の女性論」
- 111) Helvetius, *De L'Esprit*, pp.181-184.
- 112) Helvetius, *A Treatise on Man*, vol.1, pp.138-144. (根岸訳、85-89頁。)
- 113) Helvetius, *Ibid.*, vol.1, p.82
- 114) 森村『名誉と快楽』、95頁。
- 115) Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.139.
- 116) A Woman, 'Remarks on A.B.'s Strictures on the Talents of Women', p.469; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.261; A Woman, 'The Talents of Women', p.784; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.264.
- 117) A Woman, 'The Talents of Women', pp.786-787; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.269.
- 118) M.H., 'Improvements Suggested in Female Education', pp.194-195; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, pp.276-278.
- 119) この論考にはさらに、女性が経済的に独立していれば、相手の男性の側も、自分ひとりで家計全体を担うことへの危惧を抱くことなく、結婚に踏み切れるという利点があげられているが (M.H., *Ibid.*, p.195; Brooks (ed.), *Ibid.*, p.278)、ここにはフレンドとの結婚が叶わなかったヘイズ自身の経験が反映されているとも考えられる。ブルックスによれば、フレンドがヘイズとの結婚にいたらなかった理由には、彼に妻を扶養できるだけの経済的余裕がなかったという事情があったという。Brooks (ed.), *The Correspondence*, p.246. 注の12) で言及したように、フレンドが大学から受け取っていた収入は、未婚であるかぎりという条件つきであった。
- 120) M.H., 'Improvements Suggested in Female Education', p.193; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.275.
- 121) Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Woman*, p.140. (白井訳、136頁。)
- 122) Wollstonecraft, *Ibid.*, pp.218-219. (同訳、279-281頁。)
- 123) Helvetius, *De L'Esprit*, pp.78-81.
- 124) ただし、エルヴェシウスは、このように女性が慎みや羞じらいから解放され、みずから自由に男性を愛するようになることについて説明する際に、「私は同じマナーが私たちのあいだに導入されるべきであると考えているわけではない」「間違いなくお勧めできない」と付言して、そうした女性のあり方が現実のものとなることを、自身としては歓迎しない姿勢を明らかにしている。Helvetius, *Ibid.*, pp.79,104. その意味で、ヘイズはエルヴェシウスのこうした腰の引けた姿勢を、暗に批判しているとも解釈できる。
- 125) M.H., 'Improvements Suggested in Female Education', p.195; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, p.279. 強調は原文のイタリック。
- 126) Wedd (ed.), *The Love-Letters of Mary Hays*, p.5; Walker, *Mary Hays*, pp.63-64,89.
- 127) Letter from George Dyer to Mary Hays, February 6, [1797?], in Brooks (ed.), *The*

Correspondence, p.290. 書かれた日付について、年にあたる部分は記載されていないが、言及されている著作の出版年から1797年以降に書かれた手紙であることは確かである。

128) M.H., 'Are Mental Talents Productive of Happiness?', pp.358-359; Brooks (ed.), Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, pp.279-282.

129) M.H., *Ibid.*, pp.359-360; Brooks (ed.), *Ibid.*, p.283.

Mary Hays as a Female Philosopher: In Defence of Helvétius, and of Women's Intellectual Talents

Chihiro UMEGAKI

This article argues that Mary Hays (1759-1843), known as the author of the feminist and Jacobin novel, *Memoirs of Emma Courtney* (1796), demonstrated her unique philosophy in a series of articles she contributed to *The Monthly Magazine* as 'A Woman' or 'M.H.' from June 1796 to May 1797. In this newly instigated periodical, she entered into controversies and argued in defence of the philosophy of Claude Adrien Helvétius, the French materialist and utilitarian, and in defence of women's intellectual talents, which were regarded as naturally inferior to men's among the male correspondents. For Hays, the philosophy of Helvétius was important because its environmental determinism substantiated her claims that it is female circumstances, largely of education, which impede their moral and intellectual progress, and also because its sensationalism acknowledged the power of an individual's passions for his/her happiness as leading to the improvement of society. By particularly focusing on Hays's reception and appropriation of Helvétius's unconventional argument that the love of women could become an encouragement to the talents and virtue of men, this article illustrates how she finally articulated her own philosophy, whose originality made her an independent thinker dissimilar to both William Godwin, her former intellectual mentor, and Mary Wollstonecraft, her influential friend.

Keywords: Mary Hays, Women, Philosophy, Controversy, Helvétius
